

女性はどうのようにイメージ化されてきたか (2)

—おとぎ話に見られるジェンダー観—

鈴木 万里

序

前稿では、神話の中でどのような女性像が提示されているかを検証した。神話という、民族が最初に紡ぎ出す物語に描かれたイメージは、たとえ時代と共に変化するとしても女性観の原点を知る上できわめて興味深いものがある。本稿では、神話とともに長い間語り伝えられてきたフィクションである、昔話やおとぎ話の中で女性がどのような存在として描写され、どのような生き方や行動を取っているかを分析する。おとぎ話を考察の対象にする理由は主にふたつある。もともと口承で伝えられたおとぎ話は、文字化された時代により様々なヴァリエーションが存在するため、それらを比較することによって、それぞれの時代のメンタリティを知る尺度になる。従って、その編者の属する時代または階層が望ましいと判断した女性像を探る有効な手掛かりを与えてくれるのである。また、私たちは幼い時におとぎ話を何度も聞いたり、読んだりして育つ。人が成長の過程で繰り返し追体験する物語は、内在化され、無意識のうちに自己を投影する人生モデルを提供してくれる。すなわち、おとぎ話は現代でも個人のメンタリティやモラルの形成にも計り知れない影響をもっているのである。アンドレア・ドウォーキン言葉を借りれば、「私たちが昔話の世界を作り出したのではなく、昔話の方が私たちを作ったのである」⁽¹⁾とすれば、私たち自身の意識の基層にある原イメージを知るためにも、おとぎ話は有益な素材であると言えるであろう。本稿では、数多いおとぎ話の中で最も有名な2作「赤頭巾」と「シンデレラ」を取り上げることにする。なお、おとぎ話の分析については、民俗学、歴史学、社会学、神話学、心理学、精神分析学など様々な分野からの解釈が可能であり、既に多数の研究が存在するが、ここでは、中心となる女性像の分析に焦

点を当てて考察する。

I. 「赤頭巾」再話の比較

最も人気のあるおとぎ話のひとつである「赤頭巾」は、少女と狼の関わりをめぐる展開する物語で、グリム兄弟による再話が一番よく知られている。次いでシャルル・ペローのものもかなり読まれている。ところが、このふたつの話を比べると、結末が正反対であることに驚かされる。グリムによれば、「赤頭巾が助かり、狼が死ぬ」。ペローでは、「狼は赤頭巾を食べてしまった」となっている。一般に物語が死で終わる場合、誰が死ぬかはきわめて重要で、全体のテーマと密接に関わっている。特に、懲罰としての死が描かれる場合には、死ぬ人物に非があると判断されるため、誰が死ぬか、誰が生き残るかは物語の主旨を決定することになる。従って、「狼が死ぬ」グリムの話と、「赤頭巾が死ぬ」ペローの話とは、たとえ題が同じであっても、語られている内容はまったく別のものであるとすることができる。先行する物語を書き直す際に、編者は自らの価値観を反映させて、不適切な部分を削除し、強調したいことを挿入して、自由に改変する。それでは、元になった話では、どのような結末がつけられているのであろうか。口承の物語は散逸してしまうが、「赤頭巾」の原話がポール・ドラリュによって再構成されている。それは「祖母の話」という題のついた、次のような物語である⁽²⁾。

1. ポール・ドラリュ編「祖母の話」

昔、一人の女がパンを焼いて、娘に言った。「さあ、このあつあつのパンとミルクを一びん、ばあちゃんそこへ届けておくれ」そこで、女の子は出かけ、四つ角のところで人狼に出会った。人狼は女の子に言った。

「おい、どこ行くんだ？」

「あつあつのパンとミルクを一びん届けに、ばあちゃんそこへ」

「どの道、行くんだ？」と、人狼はきいた。「縫い針の道か？留め針の道か？」

「縫い針の道」と、女の子は答えた。

「そうかい。じゃあ、俺は留め針の道だ」

女の子は縫い針を集めて喜んでいたが、その間に、人狼はばあちゃんの家に着いて、ばあちゃんを殺した。そして、肉を戸棚にしまい、血はびんに入れて棚の上に置いた。そのうちに、女の子がたどり着いて、戸をたたいた。

「押したらあくよ」と、人狼は言った。「濡れた藁一本で、ふさいでるだけだか

ら」

「こんにちは、ばあちゃん。あつあつのパンとミルクを一びん、持ってきたよ」

「戸棚にしまっておくれ。中に肉が入っているからそれを食べて、棚の上のワインもお飲み」

女の子が飲んだり食べたりし終わると、そばに居た小猫が言った。「うえーっ！自分のばあちゃんの肉を食べて、血を飲んじまったよ。こわいねえちゃんだねえ」

「さあ、おまえ、服を脱いで」と、人狼が言った。「ここに来て横になるんだよ」

「脱いだエプロン、どこへ置こうか」

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえには要らないからね」

そこで、女の子は服を脱いでいった。チョッキ、ワンピース、ペチコート、長靴下……。そして一枚脱ぐたびに、それをどこに置いたらいいかと人狼にたずね、人狼もそのたびに同じ返事をした。

「火にくべてしまうといいよ。もうおまえには要らないからね」

ついに女の子はベッドに横になり、こう言った。

「あれー、ばあちゃんって、毛深いんだねえ」

「この方があったかいんだよ、おまえ」

「あれー、ばあちゃんの爪って、大きいんだねえ」

「この方が体を搔くのによくいいんだよ、おまえ」

「あれー、ばあちゃんの肩って、大きいんだねえ」

「この方が薪を運ぶのによくいいんだよ、おまえ」

「あれー、ばあちゃんの耳って、大きいんだねえ」

「この方がおまえの声がよく聞こえるんだよ」

「あれー、ばあちゃんの鼻の穴って、大きいんだねえ」

「この方がタバコをかぐのによくいいんだよ、おまえ」

「あれー、ばあちゃんの口って、大きいんだねえ」

「この方がおまえを食べるのによくいいんだよ」

「あれー、ばあちゃん、あたしおしっこがしたくなった。外へ行かせておくれよ」

「ベッドですればいいじゃあないか」

「だめだよ、ばあちゃん。外に行きたいよ」

「わかった。だけど、さっさとするんだよ」

人狼は女の子の足に毛糸のひもをくくりつけると、外へ出してやった。

女の子は外へ出ると、そのひもの端を庭のスモモの木に結んだ。人狼はだんだんイライラしてきて、「おまえ、うんこなのかい。うんこをしてるのかい？」ときいた。

返事がないのに気づいた人狼はあわててベッドを飛び出したが、女の子はもう逃げてしまっていた。そこで人狼はあとを追いかけたが、ちょうど追いついたその時に、女の子は自分の家に逃げ込んでしまった。

以上のように、原話は女の子と人狼の知恵比べという性格をもつユーモラスなもので、結末で死は描かれないのである。つまり、女の子も人狼も無事であり、女の子が最後に勝つというハッピー・エンディングになっている。グリムやペローの物語といかに隔たっているかがわかるであろう。一言でまとめれば、これは「女の子が不注意で危険な目に会うが、自分の知恵で切り抜けて人狼をうまく撃退する」という話である。それでは、さらに詳しくこの女主人公像とその行動を検証してみる。

まず、奇異に感じることは、「赤」への言及がないことであろう。「赤頭巾」という題でこの物語に親しんでいる読者にとっては、何とも物足りないかもしれない。「赤」の意味についてはペローの再話分析のところで扱う。

次に、道の選択に当たって、「縫い針の道」と「留め針の道」という聞き慣れない名前が出てくる。女の子がひとりで自分の進むべき道を選ぶという象徴的な場面で、「縫い針」の方へ向かったということは、伝統的に女性の重要な務めとしての針仕事を喜んで引き受けるという意味と解釈できる。「留め針」はピンのようなもので、安易で簡単な留め方であろう。つまり、この少女は大人になりかけている時期にあり、女性としての責任感や適性を既に備えていることが暗示されている⁽³⁾。ただし、人狼に尋ねられて行き先を告げてしまったり、途中で縫い針を集めて時間を浪費するという失敗を犯してはいるが。

さらに、衝撃的なことは、おばあさんを食べてしまうのは人狼ではなく、女の子の方であるという点である。現代人にとっては猟奇的犯罪にしか見えない行為であるが、本来カニバリズムとは、先人の知恵や勇氣などを受け継ぐための重要な儀礼である。ここで、女の子が祖母の「肉」を食べ、「血」を飲むのは、聖餐式でキリストの「肉」としてのパンと「血」としての葡萄酒を与えられるのと同様に、象徴的に祖先（または偉人）と一体化し、その知と力とを継承するという意味をもつものであろう。ただし、このような行為はこの原話が語られていた時期には既に古来の意義を失って、恐ろしいこととして受け取られていたことがわかる。子猫が「こわいねえちゃんだねえ」と驚いているのは、カニバリズムが残虐な印象しか与えない、洗練された時代に入りつつあることを示している。

また、人狼による性的誘惑が明白であることも特徴的である。人狼(Werewolf)という、人と狼の両方を意味する名は、人里離れた場所に住むアウトロー的な存在を示すと考えられる。「服を脱いで」「ここに横になるんだ」という誘いかけや、女の子が服を次々に脱いでいく場面、そして「毛

深い」「大きな肩」など成人男性を示す特徴は、思春期の少女が性的な試練の場にさらされていることを明示している。危機的な状況を脱するために少女が取った手段は、「おしっこがしたくなった」と、子供として振る舞うことであった。排泄物に言及するスカトロロジーは中世頃までよく見られる文学的特徴であるが、ここでは、人狼を油断させ、出し抜くための有効な方法として機能している。子供と甘く見た人狼は、仕方なく女の子を外に出してやり、まんまと逃げられてしまう。しばらくして気づいて追いかけたものの、追いついた時には既に女の子は家に逃げ込んでいる。この勝負で人狼は完敗を喫する。

この女の子は不注意のために人狼に目をつけられ危険に遭遇するが、事態を正確に把握し、冷静な判断のもとに、自分の知恵（体内に取り込んだ祖母の知恵のおかげもあるかもしれない）で窮地を脱して、人狼を撃退することに成功する。機転のきく、賢い女の子である。ところが、ペローによる再話(1697)では、まったく異なる女の子像が提示されている。物語は次のように展開する⁽⁴⁾。

2. シャルル・ペロー「赤頭巾ちゃん」‘Le petit chaperon rouge’

むかし、むかし、ある村に、それはそれは可愛い小さな女の子がおりました。おかあさんがこの子を猫かわいがりすれば、おばあさんはそれに輪をかけて、目に入れても痛くないほどのかわいがりよう。この人のいいおばあさんが、この子にたいへんよく似合う赤い頭巾をこしらえてやりましたので、どこへ行っても赤頭巾ちゃんと呼ばれておりました。

ある日、おかあさんがビスケットを焼いてから、赤頭巾ちゃんに言いますには、「おばあちゃまが、ご病気だそうよ。どんな具合だかお見舞いにいってきてくださいな。ビスケットとこのバターの壺をもってお行きなさい」赤頭巾ちゃんは、すぐさまお見舞いに出掛けて行きました。そのおばあさんは、よその村に住んでいたのです。さて、森を通りぬけようとしたとき、赤頭巾ちゃんはこの辺りに住む狼に出会ってしまいました。この狼は、赤頭巾ちゃんを食べたくて仕方ありませんでしたが、なかなか手を出しかねておりました。といいますのも、森では樵たちが働いているからでした。狼は、どこに行くのかと赤頭巾ちゃんに尋ねました。可哀相に女の子は、足をとめて狼の話に耳を傾けるのがどんなに危ないことか知らないものですから、こうやってしまったのです。「おばあちゃまのお見舞いに行くのよ。お母様のおみやげのビスケットとバターの壺をもっていってあげるの」

「おばあちゃまって、遠くにお住まいかい」と、狼はたずねました。

「ええ、もちろんよ。むこうに見える水車小屋をまだ通り過ぎて行かなきゃならないわ。そうして、村に入って初めて見える家が、おばあちゃまの家なのよ」と、赤頭巾ちゃんは言いました。

「なるほど、それじゃ、わしもおばあちゃまのお見舞いに行くとしよう。わしはこっちの道に行くから、あんたはあっちの道をお行き。それで、どっちが先に着くかやってみよう」と、狼は言いました。

狼は近い方の道を力のかぎり走って行き、小さい女の子は遠い道の方を歩きました。こうして女の子は、木の実を拾い集めたり、蝶々を追いかけたり、小花を摘んで花束を作ったりして楽しんでいました。狼の方は、まもなくおばあさんの家に着きました。それで、戸をたたいて、トン、トン。

「どなた」

「孫娘の赤頭巾ちゃんです」と、狼は作り声で言います。「お母様のお使いでビスケットとバターの壺をもってきたわ」

この人のいいおばあさんは、気分がすぐれず寝ていたものですから、ベッドの中から声をはりあげて言いました。

「紐を引っ張って。そしたら、掛け金がはずれますよ」

狼が紐先の玉をひっぱると、戸が開きました。狼はおばあさんに飛びかかり、あっという間もなく、貪り食ってしまいました。なにしろ、もう三日も何も食べていなかったものですから。その後で狼は戸を閉めると、おばあさんのベッドに横になって、赤頭巾ちゃんを待ちかまえました。しばらくして、赤頭巾ちゃんがやってきて戸をたたきました。トン、トン。

「どなた」

狼のしわがれ声を聞いた赤頭巾ちゃんは、最初は恐がりでしたが、おばあさんはきっと風邪でもひいたのだと思って、答えて言います。「孫娘の赤頭巾ちゃんよ。お母様のお使いでビスケットとバターの壺をもってきたの」

狼は声を和らげてベッドの中から言いました。「紐を引っ張って。そしたら、掛け金がはずれますよ」

赤頭巾ちゃんが紐先の玉を引っ張ると、戸が開きました。

女の子が入ってくるのを見ると、狼は布団の中にもぐりこんで言いました。「ビスケットとバターの壺は、そこの大箱の上に置いてちょうだい。それから、こっちに来て横におなりなさいな」

赤頭巾ちゃんは、服を脱いで布団の中に入りに行きました。そうしますと、寝間着を着ているおばあさんの様子がおかしいものですから、とてもびっくりしました。女の子は言いました。

「なんて大きな腕をしてるの、おばあちゃま」

「あんたをぎゅっと抱きしめられるようにですよ」

「なんて大きな足をしてるの、おばあちゃま」

「はやく走れるようにですよ」

「なんて大きな耳をしてるの、おばあちゃま」

「しっかり聞こえるようにですよ」

「なんて大きな目をしてるの、おばあちゃま」

「しっかり見えるようにですよ」

「なんて大きな歯をしてるの、おばあちゃま」

「おまえを食いやすいようにじゃないか」

そう言うが早いか、この性悪の狼は赤頭巾ちゃんに飛びかかり、すっかり食べてしまいました。

教訓

もうおわかりだろうが、年端のいかない子どもは、

とりわけ、可愛くて、育ちが良くて、

品の良い若い娘は、

通りすがりの者に耳を傾けてはいけない。

そんなことをすると、

狼に食べられても、当たりまえということになる。

狼といっても、すべての狼が、

同じ種類とは限らない。

中には愛嬌をふりまいて、

小声で、甘く、優しい語り口で、

おとなしく、愛想よく、朗らかに、

若い婦人をつけまわし、

家にもぐりこみ、寝室にまで入りこんでくる輩もいる。

ああ、こんなことを知らない人には、狼の中でも

とりわけこのおとなしそうな狼ほど危険なものはない。

ペローの編集したこの「赤頭巾ちゃん」は、口承で語り伝えられてきたこのおとぎ話の、ヨーロッパで記録に残る最初の物語とされている。フランス語の題では「小さな赤帽子」であるが、英語の Little Red Riding Hood「小さな赤い乗馬ずきん」を訳した「赤頭巾」が一般的なので、ここではそれを用いている。一読すると、物語が原話よりも洗練され、女の子が可愛らしく描かれていることに気づく。それでは、この再話の特徴をあげてみる。

まず、「赤」という主人公のトレード・マークが登場する。なぜ、ペロー

が「赤い帽子」を被せたのかについては、「赤」が太陽や思春期を象徴するという説⁽⁵⁾や、五月祭の女王が被る花の冠との関連を指摘する説⁽⁶⁾など様々な解釈がある。しかし、ペローの再話では、おばあさんが孫娘を目にいれても痛くないほど可愛がって、よく似合う赤い帽子を作ってあげた、と祖母の溺愛が強調されているので、この「赤」は虚栄心や罪を示唆すると考えるのが妥当であろう。アンデルセンの「赤い靴」やホーソンの『緋文字』などにも同様の例がある。また、原話では女の子の性質や祖母との関係について何も伝えていない。昔話の特色でもあるが、漠然とした状況で、いつでも、どこでも、誰にでも当てはまるような普遍的な設定で語られる。しかしペローでは、この女の子は祖母に甘やかされ、スポイルされている、という家族内の特定の人間関係をもちこんでいるのである。

次に、この女の子は重大な失敗を犯していることが強調される。「足を止めて狼の話に耳を傾けるのがどんなに危ないことか知らない」(＝無知)、そして見知らぬ狼と話をしてしまうこと(＝不用意)、さらに祖母の家を詳しく狼に教えてしまうこと(＝愚か)、加えて狼に言われるままに遠い方の道を行ってしまうこと(＝逸脱行為)である。原話の女の子が自分で進む道を選んでいのに比べて、あまりに警戒心と自主性に欠ける行動と言えるであろう。また、語りの口調も女の子の一連の行動に対する非難または警告を含んでおり、原話の語りが淡々と事実を述べる、いわば中立的な立場をとっているのと対照的である。さらに、ペローでは、この女の子は勝手に寄り道してしまい、「木の実を拾い集めたり、蝶々を追いかけたり、小花を摘んで花束を作ったりして楽しんで」しまう。つまり、感覚的な喜びに耽るのである。愚かで意志の弱い女の子という印象が一層強まる。

17世紀のフランス宮廷で活躍したペローは、洗練された読者向けに原話の猥雑さや品のない部分を慎重に削除している。女の子が人狼と言葉を交わしながら服を一枚ずつ脱いでいく場面は、ごく手短かに「服を脱いで布団の中に入」という叙述で置き換えられている。女の子がベッドで発する最初の言葉であった「毛深い」という描写も省かれている。しかし、最大の変更点は、女の子が知らずにおばあさんを食べる原話に対して、ペローでは狼が赤頭巾を食べてしまう、という場面で物語が終わっていることである。狼は何ら罰せられてはいない。とすれば、悪いのは赤頭巾の方である。彼女が愚かなために、祖母と自分の死を招き寄せたのである。原話では知恵比べという性格をもつハッピー・エンディングの物語が、ここでは規律を守らない女の子の哀れな結末という因果応報の教訓話へと変化している。つまり、これ

は、女の子が勝手に寄り道して危険を招き寄せてしまい、殺されてしまう、という物語なのである。狼の攻撃を性的誘惑ととらえれば、レイプを招いた責任は女性側にあるという論理になるであろう。

物語の末尾に付け加えられた韻文による「教訓」は、女性に非があることを強調している。「通りすがりの者に耳を傾け」たりすれば、「狼に食べられても、当たり前」なのである。優しい口調で愛想良く近づいてくる狼は、油断すれば「寝室にまで入り込んでくる」危険な存在なのだと警告する。ここで、狼が男性を表し、赤頭巾が「可愛くて、育ちが良くて、品の良い若い娘」であることが明らかとなる。性的誘惑の責任を女性側に転嫁する論理が繰り返される。

ペローが若い女性への戒めという内容の「赤頭巾」を書いてから約百年後、グリム兄弟の編集による再話（1812）は、原話ともペローとも異なった物語の展開を見せる。以下は初版によるテキスト⁽⁷⁾である。

3. ヤーコブ、ヴィルヘルム・グリム「赤帽子ちゃん」‘Rotkappchen’

むかし、むかし、あるところに可愛い小さな女の子がおりました。この子を見ると誰でも愛さずにはいられませんでした。けれども、この子を誰よりも愛していたのはおばあさんでした。おばあさんはこの子になにをあげても、あげたりないと思っておりました。あるとき、おばあさんは小さな赤いヴェルヴェットの帽子をこの子にプレゼントしました。それはとてもよく似合ったので、この子はこの帽子ばかりをかぶりたがりました。それで、この子は赤帽子ちゃんと呼ばれたのです。

ある日のこと、おかあさんが言いました。「おいで、赤帽子ちゃん、このケーキとワイン一瓶、おばあさんに持っておいき。病気で弱っているからね。これを食べれば元気になるわ。いい子にしてるんですよ。それから、おばあさんに私からよろしくってね。ぐずぐずしないで、まっすぐいくのよ、でないとおまえは転んで瓶を割ってしまうわ。そんなことになると、病気のおばあさんになにもあげられなくなるでしょ」

赤帽子ちゃんはおかあさんの言いつけどおりにすると約束しました。さて、おばあさんは村から半時間ばかりかかる森の中に住んでおりました。そして、赤帽子ちゃんは森に入るとすぐ、狼に出会ったのです。けれども、赤帽子ちゃんは狼がどんなに悪い動物か知りませんでしたので、恐がりませんでした。

「こんにちわ、赤帽子ちゃん」

「こんにちわ、狼さん」

「こんなに早くどこへお出掛けかな、赤帽子ちゃん？」

「おばあさんの家よ」

「エプロンの下に何を持ってるの？」

「おばあさんが病気で弱っててね、あたしはケーキとワインを持ってくところなの。ケーキはね、昨日焼いたのよ。これを食べるとおばあさんは元気になるわ」

「おばあさんはどこに住んでるの、赤帽子ちゃん？」

「ここからもう一五分くらいかかる森の中よ。おばあさんの家は三本の大きな樫の木の下にあるの。はしばみの茂みがあるからすぐわかるわ」と赤帽子ちゃんと言いました。

狼はひそかに考えたのです。これはうまいご馳走だ、この子を手に入れるにはどうしたらいいのか、とね。

「ねえ、赤帽子ちゃん」と狼は言いました。「森のなかのきれいな花を見たかい？ どうしてまわりを眺めてみないの？ 小鳥たちがどんなに愛らしく囀っているか、君は気づいてないだろう。君はまるでまっすぐ村の学校へ向かってるみたいに、どんどん歩いてくけど、この森の中はとっても楽しいんだよ」

赤帽子ちゃんはあたりを眺めて、お日さまの光が木々の間からこぼれている様子や、まわりに花が咲き乱れている様子を見ました。そこで考えたのです。そうだ、おばあさんに花束を持ってけば、喜ぶわ。まだ早いからそんなに遅くならずに着くわ。それで、まっしぐらに森の中へとび込んでいって、花をさがしたのです。そして、花を一輪摘むたびに、別のもっときれいな花を見かけたように思うのです。それで、その花を摘もうと森の奥へ、奥へと駈けて行きました。けれども、狼はおばあさんの家へまっすぐ行き、扉を叩いたのです。

「そこにいるのはどなた？」

「赤帽子ちゃんよ。ケーキとワインを持って来たわ。扉を開けて」

「掛け金を持ち上げるだけだよ」おばあさんは大きな声で言いました。「わたしや弱ってしまって、起きあがれないんだよ」

狼が掛け金を持ち上げました。すると扉はパッと開きました。狼はまっすぐベッドへ行き、おばあさんを呑み込んでしまいました。それからおばあさんの着物をつかみ、それを着てナイト・キャップをかぶり、ベッドに横になりました。そしてカーテンを引いたのです。

その頃、赤帽子ちゃんは花を求めて駈けまわっておりました。そしてもう持てないくらい花をつんで、ようやくおばあさんの家へまた歩き始めたのです。家につくと、扉が開いているのに気づきました。赤帽子ちゃんとはまどいました。しかも、部屋に入ると、いつもと違ってが違っておりましたので、ああ、今日はなんだかおそろしい、いつもはおばあさんの家にくるのは好きなんだけど、と思いました。それから、ベッドのところへ行き、カーテンを開けました。おばあさん

はキャップを目深にかぶり、横たわっておりましたので、いつもと違った様子になっていました。

「あれ、おばあさん、なんて大きな耳なの！」

「おまえの言うことをよく聞くためだよ」

「あれ、おばあさん、なんて大きな目なの！」

「おまえをよく見るためだよ」

「あれ、おばあさん、なんて大きな手なの！」

「おまえをよくつかむためさ」

「あれ、おばあさん、なんてものすごく大きな口なの！」

「おまえをよく食べるためさ」

そういうと狼はベッドから飛び出し、赤帽子におどりかかって、呑み込んでしまいました。狼はご馳走をおなかにおさめると、もう一度ベッドに横になって、眠り込み、大いびきをかき始めたのです。その時、猟師がたまたま通りかかって、おばあさんのいびきに驚きました。これは覗いてみたほうがいい。それから彼は家の中へ入って行きました。そして、ベッドのところへ行くと、そこに長いあいだ追いつけていた狼を見つけたのです。狼は間違いなくおばあさんを食べてしまっている。でもひょっとすると助けられるかも知れん。射つまい、と猟師は考えました。それからナイフを握って、狼の腹を切り開いたのです。そして、さらに二、三カ所切った後で、燃え立つような赤い帽子に気づきました。それでもっと切ってみると、女の子が飛び出して叫びました。「ああ、とてもこわかった！狼のお腹の中は真暗だったわ」そして、おばあさんも生きて出てきたのです。そこで、赤帽子ちゃんは大きくて重い石をいくつも取って来ました。それから、皆で狼の腹にそれを詰めこんだのです。そして、狼が目をさましたとき、とび上がってにげようとしたのですが、石がとても重かったので倒れて死んでしまいました。

それで三人は喜びました。それから、猟師は狼の皮を剥いたのです。おばあさんは赤帽子ちゃんが持って来ていたケーキを食べ、ワインを飲みました。そして赤帽子ちゃんは考えました。これからは、おかあさんが寄り道をしてはいけないって言ったときは、絶対、一人で森の中へ迷い込んだりしないわってね。

こういうふうにも言われています。ある日、赤帽子ちゃんがお菓子を持って、また、おばあさんの家へ行ったとき、別の狼が話しかけて、寄り道するように誘いかけようとしたのです。しかし、今度は、赤帽子ちゃんは用心して寄り道しませんでした。そして、狼に会ったこと、狼がこんにちわと挨拶したこと、でも、「見通しのきく大きな道にいたのでなければ、あたしを食べてしまいそうな」とてもいやらしい目つきをしていたことなどを、おばあさんに話したのです。「おいで」とおばあさんは言いました。「狼が入って来れないように扉を閉めましょう」

その後すぐに、狼はドアを叩き、大声で叫びました。「開けてちょうだい、おばあさん。赤帽子ちゃんよ。お菓子を持ってきたわ」けれども、二人はだまって、扉も開けませんでした。それで悪い奴は家のまわりを何度か回り、とうとう屋根の上に飛び乗りました。赤帽子ちゃんが家へ帰る夕方まで待とうと思ったのです。それから、こっそり後をつけて、暗い所で食べるつもりでした。けれども、おばあさんは狼のたくらみがわかっておりました。家の前にうまい具合に大きな石の水槽がありました。「バケツを取っておいで、赤帽子ちゃん、私は昨日ソーセージを煮たんだよ。それを茹でた水を持って来て、水槽の中へ流し込んでごらん」赤帽子ちゃんは大きな、大きな水槽を一杯にするまで、その水を何度も運びました。それからすぐ、ソーセージの匂いが狼の鼻先にとどきました。狼はクンクンかいで、下を見たのです。しまい、首を長く伸ばしましたので、屋根の上でバランスがとれなくなってしまいました。そして、すべりだして、まんまと水槽の中に落ちこみ、溺れて死んでしまったのです。そして、赤帽子ちゃんはウキウキとした気分の家へ帰ったということです。

グリムによる再話では、ハッピー・エンディングとなっているが、原話の結末とはまったく異なる内容になっており、新しい場面や登場人物が導入され、ほとんど創作と言えるほどである。それでは、主な特徴をあげて考察してみる。

まず、前述の2編と比較して、娘をお使いに送り出す時の母親の指示が細かいことに気づく。「いい子にして」、「よろしく」と伝え、「ぐずぐずしないで、まっすぐ行く」ようにと注意する。後の第7版では、さらに「暑くなる前に早く出かけるように」「おばあさんのお部屋に入るときにはおはようございます、と言うのを忘れない」ように、「あっちこっちよそ見」しないように、と指示が増える。グリムは明らかに家庭内での躾の重要性を強調したのである。これは、一連の出来事が終わって赤帽子が救助された後で、「これからは、おかあさんが寄り道をしてはいけないって言ったときは、絶対、一人で森の中へ迷い込んだりしないわ」と反省する箇所符合する。要するに、母親の言いつけをきちんと守っていたら、この子は危険な目に会うことはなかっただろうというのが、この物語の主旨であり、親の権威を印象づける効果をねらっていると考えられる。

ペロー同様に、この赤帽子も森の中で寄り道するという失敗を犯すが、これは「おばあさんに花束を持ってけば、喜ぶわ」と祖母思いの孫娘としての愛らしさゆえで、母の指示に従わなかった非にもあるていど情状酌量の余地

がある。祖母の方で「この子を誰よりも愛して」、贅沢なヴェルヴェットの赤い帽子を贈るほど可愛がれば、孫娘の方も「おばあさんの家にくるのは好き」となっている。前2作には見られない、愛情に満ちた家族関係が提示されている。

また、性的誘惑を思わせる箇所がすべて削除されている点もグリムの特徴である。女の子が服を脱いだり、狼のベッドに入るといふ、原話やペローに含まれる部分が省かれ、狼と女の子のやりとりは簡略化されている。これは、19世紀の謹厳な道德観を反映しており、グリムが上品で無害な教育書をめざしたことが推察される。なお、グリムにこの物語を提供した女性は、マリー・ハッセンプフルークというフランスの新教徒ユグノーの一族出身で、中流または上流階級が出典となっているという事情⁽⁸⁾も、上品な表現に限定されている一因であろう。

しかし、グリムによる最大の改変は、銃を携えた猟師を登場させ、女の子とおばあさんを生き返らせた部分である。それまで、母、祖母、女の子、という女3代と狼という他者との関わりを扱った物語であったものが、ここで、武器をもつ男性という象徴的な父親像を加えることで、まったく別の内容に転化する。女たちの窮地を救えるのは、超越的な力（武器）をもつ男性だけである（まるで神のように）、という家父長制を補強する意味を担うことになる。19世紀という時代背景を考慮に入れば、武器をもつ男性像は、未開の地（狼）を切り開き、文明（母親による教育）を浸透させ、キリスト教の神を中心とする秩序や恩寵（家父長制的支配構造に基づく社会の安定）をもたらす帝国主義の論理を体現する人物と解釈することも可能である。いずれもハッピー・エンディングをもちながらも、原話の女の子が自分の知恵と行動力で窮地を脱するのに比べて、独力ではなすすべもなく、男性による問題解決に頼らざるをえないグリムの赤帽子は、女性は男性の保護下にあるべきという近代の女性観を反映していると考えられる。

また、グリムは赤帽子が母親の忠告の重要性を認識した後で、さらに後日談を加えている。この部分のかえって物語の統一感を損なうとして、絵本などでは省略されることが多い。グリムはなぜ明らかに余計な繰り返しと思われる挿話をあえて入れたのであろうか。おそらく、これは、赤帽子が母親の教えを確実に習得したことを強調するためと思われる。前回の反省を踏まえて、赤帽子は「今度は……用心して寄り道しませんでした」。だからこそ祖母と力を合わせて狼を退治することができたのである。母の言いつけを守れば、危険に身をさらすこともないという主張が再確認されている。すなわ

ち、この後日談は母親による教育効果の証明の役割を担っているのである。

グリムの再話に見られる顕著な特徴は、家族イデオロギーの強化をめざしている点である。愛情に満ちた家族、母親による教育の重要性、父親の絶対的権威と力、親の言いつけに従う素直で従順な女の子など、近代家族の理想像とその栄光がおとぎ話の形を借りて提示されている。原話が女の子と人狼との一騎打ちという様相を示しているのに対して、グリムでは女の子ひとりではもはや狼に太刀打ちできず、父親的な男性像が代わりに戦ってくれる。家族全員で結束すれば、あらゆる難局を乗り切ることができる、とグリムの「赤帽子ちゃん」は語っているように見える。しかし、その一方で女の子の自律性は確実に失われているのである。

以上のように「赤頭巾」の再話を比較してみると、その内容が微妙に異なっていることが明らかである。原話は「女の子が不注意で危険な目に会うが、自分の知恵で切り抜けて狼を撃退する」という筋であるのに対し、ペローは「女の子が勝手に寄り道して危険を招き寄せてしまい、狼に殺される」、また、グリムでは「女の子が母親の言いつけを守らずに寄り道して危険を招き寄せてしまい、狼に襲われるが、猟師が救ってくれる」それに伴って女性像に著しい変化があることがわかる。原話（中世後期 15 世紀頃か？）、ペロー（1697）、グリム（1812）と時代を経るに従って、女主人公が可愛らしく、無力になっていく。それぞれの物語は成立した時代の女性観を反映していると考えられるので、400 年ほどの間に女の子は自分の知恵と行動力で事態を開き直すことを放棄して、問題解決能力を失い、ついには年長の男性に庇護を求めざるをえない状況に至ったことになる。近代は子供や女性に「無垢」という属性を付与して賞賛したが、一方でそれは「無能力」をも意味していたのである。原話の女の子が示す、一種のたくましさ、したたかさは、「生意気」または「女の子らしくない」として近代では肯定的な評価を受けなかった（従って、書き換えられた）ことがわかる。

また、原話では見られない「懲罰としての死」がペローやグリムでは導入されていることも特徴的である。フーコーは 19 世紀における規制と懲罰への管理原則について詳述している⁽⁹⁾ が、17 世紀末のペローに既にその萌芽が認められるのは興味深い。これによって、物語全体のメッセージは変わってくる。ペローでは赤頭巾の死は、彼女に非があることを示している。グリムでの狼の死は、狼が悪の報いを受けたのである。しかも、この対決は、原話やペローでは女の子-対-狼であったが、グリムでは、猟師-対-狼となって

いる。赤帽子は救助を待つだけで、クライマックスの対決場面から姿を消している。それだけ女の子の存在が矮小化されていると言えるであろう。

現代の日本人の大半がグリムの「赤帽子ちゃん」を読んで育ち、記憶しているという事実は、20世紀がグリムの再話をしのぐ物語を生み出さなかったのか、または、現代の女性観が実は19世紀のものとあまり変わらないことを意味するのであろう。フーコーが、「長いこと私たちはヴィクトリア朝の体制に耐えてきたし、今日なおそれを受け入れている」⁽¹⁰⁾と述べたのは、あながち的はずれではないことになる。あるいは、親の躰に好都合と判断されたためにグリムが選ばれたとも考えられる。グリムばかりではなく、原話の女の子のもつ自律性、活力、おおらかさなどをもっと評価する必要があるのではなかろうか。

II. 「シンデレラ」物語の変遷

「赤頭巾」と並んで人気があり、しかも世界中で様々な類話をもつおとぎ話が「シンデレラ」であろう。最古の「シンデレラ」型物語の記録は、大正15年に南方熊楠が指摘した中国9世紀の『酉陽雜俎』という文献に含まれる葉限を主人公にしたものである⁽¹¹⁾という。日本にも越後地方に栗福または糠福を主人公にした同型の民話が数多く伝えられていたらしい⁽¹²⁾が、現代の日本人が「シンデレラ」に接するのはウォルト・ディズニーの絵本または映画を通してが最も多い。19世紀のグリムを踏襲している「赤頭巾」とは異なり、「シンデレラ」は20世紀の再話が流布しているのである。しかし、興味深いことにディズニーの再話はグリムではなく、17世紀のペローをもとにして書き換えられている。20世紀の女性観を知る上で、これら3種類の「シンデレラ」に加えて、さらに早い時期の再話1例を比較検討してみることにはしたい。なお本稿では、シンデレラの性格、助力者は誰か、父親の存在、義理の姉たちは最後にどうなるか、を中心に分析する。

口承で伝えられた「シンデレラ」型の物語がヨーロッパで完全な形で最初に記録されたのは、ペローによってではなく、イタリアのジャンバティスタ・バジレによる『ペンタメローネ』（五日物語）に含まれる「猫のシンデレラ」であるという。1636年にナポリ方言で出版されたこの物語集の「シンデレラ」像は、私たちが抱いているイメージとはかなりかけ離れてい

るが、原話に近いのではないかと思われるので、以下に引用しておく⁽¹³⁾。

1. バジーレ「猫のシンデレラ」

さて、ある時妻を亡くした公爵がいた。公爵には目に入れても痛くないほどかわいい娘が一人いた。娘にはりっぱな家庭教師をつけ、縫物やレース、縁飾りの付け方などを習わせた。この教師も娘を言葉に尽くせないほど大事にしてかわいがった。しかし父親の公爵はその後すぐに再婚した。継母は意地が悪く、気の短い憎々しげな女で、たちまち継子を嫌うようになった。義理の娘に対し敵意を抱き、しかめっつらを見せたり、にらみつけたりするので、恐ろしさで娘は震え上がった。

かわいそうな娘は継母の苛酷な扱いをよく家庭教師に訴えた。そしてその最後には決まってこう言ったものだ。ああ、あなたが私のお母さんになって下さるのならいいのに。だってあなたは私に優しくして下さるのだもの。娘はこの言葉をまるで耳に入った蜂がぶんぶんうなるように家庭教師にあまりにしばしば言うので、家庭教師はついに悪魔の誘いに乗ってこう言った。「もしあなたが今から私が言うこの無鉄砲な考えに従うというのなら、私はあなたの母親になりましょう。そうすればあなたは私の大事な娘ということになるわ。」彼女は遠回しの前口上を言い続けるのでゼゾーラ(これが娘の名前だった)はさえぎって言った。「口をはさんでごめんなさい。先生が私をととても愛して下さっているのはよくわかっています。こういうのを、まるで母親のように、とでもいうのでしょうかね。そういうことになるとして、どうすればよいか教えて下さしな。私はこちらにやって来ただけでわかりませんもの。あなたが筋書きを書いて下されば、私はそれに同意することでしょう。」「では、耳を澄ましてしっかりとお聞きなさい。そうすればこれからは一番上等の小麦粉から作ったおいしいパンをいつも食べることができるようになるわ。」娘の家庭教師はこう言った。「お父様がお出かけになったら継母にこうおっしゃい。押入の大きなタンスの中にしまっている古いドレスがひとつ欲しい、と。そうして今着ているドレスはしまっておきなさい。あなたの継母はあなたがみすばらしいをぼろをまとっている方がよいものだから、よろこんで衣装箱を開けて「蓋をお持ち」と言うでしょう。継母が箱の中を探している間蓋を持っておやりなさい。そして急にその手を離すのです。そうすれば彼女は首の骨を折ってしまうでしょう。その後で、ね、あなたのお父様はあなたのためなら偽金を造るのだから嫌とはおっしゃらない方よ。だからお父様があなたを引き寄せて優しくして下さる時にこうお願いなさい。私を母親に迎えて欲しいと。そうすればあなたはいつまでも幸せに暮らし、そして私にとっても一生大事な御主人様ということになるでしょう。」

この計画を聞いた後、家庭教師の助言を一つ残らず実行するまでの時間はゼゾー

ラにとっては一時間が一年にも思えるほどだった。継母の喪が開けると彼女は父親に自分の家庭教師と再婚してくれるようにと耳打ちしはじめた。はじめは公爵も娘の言うことを冗談としか思わなかった。しかし、あんまりたびたびこれを口にしたので、ついにゼゾーラは自分の意を達することができることになった。公爵が娘の強い説得に応じたのである。こうして娘の家庭教師だったカルモシーナは公爵と結婚し、華々しい祝賀の宴が催された。

さて、この新しい夫妻が二人きりで楽しんでいる頃、ゼゾーラは自分の家のバルコニーに一人たたずんでいた。すると鳩が一羽壁の方に飛んで来て彼女にこう言った。「もし何か欲しいものができたら言ってよこしなさい。サルジニア島の妖精の鳩に欲しいものがあると。そうすればすぐにもらうことができるでしょう。」

新しい継母はゼゾーラをテーブルの上席につかせてくれたり、一番おいしいところを食べさせてくれたりと、いたれりつくせりのかわいがりようだったが、それも最初の一週間足らずの間だけのことであった。そのうちすぐにゼゾーラがこの継母にしてやったことは忘れられてしまい、記憶の中からきれいさっぱりと消え去ってしまった。(邪な心の女だったのは何とも嘆かわしいことである。)逆に彼女はそれまでひた隠しにしてあった自分の六人の娘たちを前面に出してくるようになり、夫をうまく操って自分の娘たちがかわいがられるように仕向けたので、ゼゾーラのことは実の父親にさえも忘れ去られてしまった。「今日の敗者の明日は赤貧」といわれるように、そんなわけでゼゾーラはついにサロンのぜいたくな暮らし、天蓋のついたベッドで眠り、すばらしい絹や金糸のドレスを身に纏う生活から、台所の片隅で炉の残り火で暖をとり、また皿洗いのつぎはぎだらけの服を身に纏い、杓ではなく肉料理用の鉄の串を扱う身分へと転落してしまった。名前さえ、もはや誰も彼女をゼゾーラとは呼ばず、皆「台所の隅で灰まみれでうずくまる猫シンデレラ」と呼ぶのだった。

ある時たまたま公爵が国家の急務でサルジニアに行かなければならなくなった。出発の前、公爵は六人の義理の娘たち、インペリア、コロンバ、フィオレラ、ディアマンテ、コロンビーナ、パスカレラのそれぞれにみやげは何が欲しいかと尋ねた。ひとりは素晴らしいガウンが欲しいと言い、ひとりは髪飾りの付いた帽子、ひとりはお化粧品、また別の娘は遊んで過ごすためのゲームを、と言う。みんなそれぞれ違った物を欲しがった。ようやくゼゾーラの番になったが、それも半ばからかう調子で公爵は実の娘にこう聞いた。「さあ、今度はおまえだ。さて何が欲しい。」「いいえ何も。ただ、島の妖精が飼っている鳩に私に何か届けてくれるようにとお伝え下さいな。もしお父様が伝えてくださるのを忘れたら御一行は行くも戻るもできなくなることでしょう。私の申し上げたこと、どうぞ覚えておいてくださいましね。もしお約束を破るようなことがあればきつとひどい目にお遭いになることになりましょうから。」

公爵は出発し、サルジニアでの仕事を終え、そして義理の娘たちの望みの品を

買い求めたが、ゼゾーラの頼みごととはきれいさっぱりと頭の中から消えていた。一行は船に乗り込み帆を上げて出航しようとしたが、船は一向に動こうとせず港から出る気配もない。まるで海に浸む大きなヤツメウナギに押しとどめられてでもいるかのようだった。絶望的な気持ちでいた船長は疲れ果てふとまどろんでしまったが、その時夢の中に妖精が現れてこう語った。「船がなぜ港を出られないか、その理由がおわかりか。おまえが乗せている公爵は、義理の娘たちとの約束は覚えていたのに、自分の血肉を分けた実の娘との約束を破ってしまったからさ。」目が覚めるとすぐ船長はこの夢のことを公爵に話した。公爵は自分の落度にあわてふためき、妖精の住む洞穴へと急いで出かけた。妖精に娘の代わりに挨拶をし、何か送ってくれるようにという娘の言付けを伝えた。

するとどうだろう。洞穴の中から町旗のように美しく装った若い女が現れ、公爵の娘にこの自分を覚えていてくれたことを感謝すると伝えるように、そして自分がいつも見守っているからよい娘でいるようにと伝えてくれと公爵に頼んだ。こう言いながら女は公爵になつめの木とスコップ、そして絹のハンカチのはいった金色の缶を手渡し、なつめの木を植え、他の二つの品を使って木を大事に育てるようにと言った。

この贈物に公爵は驚いたが、妖精に別れを告げ自分の国に向かった。帰国すると義理の娘たちに約束の品々を与え、そして実の娘には最後に妖精から言付かった品々を手渡した。ゼゾーラは飛び上がらんばかりに喜んでなつめの木をきれいな鉢に植えた。そして毎日水を与え、余分な水はもらった絹のハンカチで拭き取った。

こうした心のこもった世話のおかげで四日の後にはなつめの木は女性の背の高さほどに育ち、そこから妖精が立現れて娘にこういった。「ゼゾーラ、おまえの望みは何？」たまにでいいからお姉様たちに知られずに外に出てみたいと思うの、と娘は答えた。「そう思った時にはいつでもなつめの木のもとに来てこうおっしゃい：

私の黄金のなつめの木よ、
黄金のシャベルでおまえを植えてあげた、
黄金のジョウロでおまえに水をやり、
黄金のハンカチで濡れた枝葉を拭いてやった、
その私を今度はおまえが美しく装わせておくれ。
それから着ている服を脱ぎたい時には最後の行をこう変えて言うのよ：
その私の着物を脱がせて今度はおまえにかけよ、とね。」

ある祭りの日、例の元の家庭教師の娘たちが咲き誇る花のような装いで行列に加わるために外出することになった。娘たちは満開の花のようにけばけばしくお化粧をし、リボンや鈴やまがいの小物で飾りたて、バラなど強い香りの香水をぶ

んぶん匂わせて出かけて行った。そこでゼゾーラはなつめの木のもとにかけ寄って妖精が教えてくれた言葉をささやいた。するとたちまちゼゾーラは12人のこざっぱりとした制服を着た従者を連れて白い馬に乗り美しく装った女王のように変わった。そして自分も姉妹たちと同様に出かけて行った。彼女たちはそれがゼゾーラだとは夢にも思わず、このかわいらしい小鳩のような女性の美しさに羨ましきでいっぱいだった。好運なめぐり合わせとでも言おうか、丁度王様がその場に来合わせ、ゼゾーラを目を奪うほどの美しさの虜になってしまった。彼は一番忠実な部下にこの美しい婦人の素性と住まいを調べるようにと命じた。家来の者は直ちに犬に彼女の足跡を探らせたが、ゼゾーラはこの罌をすばやく察知し、なつめの木からかねてから何かの場合にと貰っておいた金貨をひと握りばらまいた。まばゆい金貨欲しさに目のくらんだ家来はその婦人を乗せた馬車の後をつける職務をすっかり忘れ、立ち止まって金貨を拾い集め始めた。そのあいだに彼女は一目散に馬を駆って家に帰り着き、妖精が教えてくれたようにしてすぐに着替えを済ませた。例の六人姉妹の小うるさい女たちもすぐに帰宅し、ゼゾーラをくやしがらせて余計に惨めな思いをさせてやろうと、祭りで目にした出来事をことさらに長々と語って聞かせるのだった。

とかくするうちに例の部下は王様の所に戻って来、拾った金貨のことを報告した。これに対し王様は、わずかばかりの金のために自分の心待ちにしていたものを台無しにしてしまったと言ってかんかんになって怒った。そこで次の祭りの日には何としてもこの美しい小鳩のような娘が誰か、その住まう巢はどこかを捜し出すよう命じた。

次の祭りの当日、例の姉妹たちはこぞってけばけばしく身を飾りたて、まるで卑しめるようにゼゾーラを炉端に残して出かけて行った。ところがゼゾーラはすぐさまなつめの木のもとに駆け寄ってこの前と同じ言葉をつぶやいた。するとどうだろう。一群の乙女たちが現れた。そのうちのひとは鏡を持ち、ひとはへちま化粧水の入った瓶を持ち、またひとは巻き毛を作るヘヤーカーラーを手にしていた。更にひとは口紅を、また櫛やピンを持つ者もいたし、ドレスの係やネックレスやイヤリングを持つ係もいた。彼女たちは皆でゼゾーラを取り囲み、太陽のように華やかに美しく飾りたて、そうして揃いの制服を着た召使や従者付きの六頭立ての馬車に彼女を乗り込ませた。彼女はこの前と同じ場所に現れ、この前と同じ様に6人の姉妹たちの心には羨ましきの、そして王様の胸の中には恋の炎を燃え上がらせた。

今度も、ゼゾーラが立ち去ろうとする時に王様の家来がその後をつけようとした。しかし追いつかれないようにとゼゾーラは、今度は真珠や宝石を一握りばらまいた。後を追っていた忠実な家来はこれを拾い上げたい誘惑にどうしても打ち勝つことができなかった。真珠や宝石といえどもあまりにも高価なもので、無視して通りすぎるわけにはいかなかったのである。こうしてゼゾーラは前回同様に家

に辿り着き、着替えをすることができた。例の家来は呆然としたさまで王様の所に戻って行ったが、王は強い調子でこう言った。「おまえの先祖の命にかけて、もしあの娘を今度探し出して来なければ、おまえを袋叩きにしてやる。それに髪の毛や髭の数ほどもおまえを蹴り飛ばしてやるぞ。」

次の祭りの日、姉妹たちが出かけてしまったのでゼゾーラはなつめの木のもとに行き、まじないの言葉を唱えた。すると今度もまた素晴らしい装いに変わり、まばゆいばかりの馬車に乗って数多くの従者に取り囲まれていた。それはまるで高級娼婦が公道で逮捕されて警察の者に取り囲まれているとでもいうような様だった。義理の姉妹たちをさんざん羨ましがらせた後でゼゾーラはその場を立ち去ったが、その後をまたもや王様の家来が追いかけていた。家来は今度こそはと二重の紐で自分を馬車に結わえ付けておいた。自分の側にピッタリとつけてくるのを見たゼゾーラが「急いで」と叫ぶと馬車はたちまち凄じい速さで走り出した。ところがあまりに急がせたので彼女はうっかり自分の履いていたこの世のものは思えぬほど豪華で美しい靴カバーの一方を落としてしまったのである。

家来は先を飛ぶがごとくに駆け去って行く馬車に追いつくことはできなかったが、この靴カバーを拾い上げ王様の所へ持ち帰り事の始終を報告した。王様は靴カバーを手にとるとこう言った。「足元がこんなにも美しいのなら、その上はどんなにか素晴らしいことだろう。なんと美しい燭台よ、私の胸を焦がすろうそくの炎よ！私の命を煮えたぎらせる鍋を据える足ついたの釜よ。靴のかかについているのは何という美しいコルクなのだろう。それには愛の釣り糸がついていてこの私の魂を捕らえてしまって放さない。ほら、私はこの靴を抱き、この腕に包み込もう。もし美しい幹や枝に私の手が届かぬというのなら根っこをさえいとおしもう。もしこの靴の上に載るものを我が手中にできぬのなら、靴にでもよい、我が口づけを与えよう。靴よ、おまえは白く美しい足を閉じ込める箱だった。そして今度は美の雷に打たれたようなこの私の心を罌にかけてしまった。おまえのせいで私の命をもてあそぶあの女の背は15インチも高くなっていた。靴よ、おまえのおかげでおまえをこの手から放さぬ限り、私の人生はその高さの分だけ甘く、優しいものになるのだ。」

こう言うと王様は大臣を一人呼び、ラッパを合図にお触れをだすように命じた。国中の婦人は皆祭りに出かけ、王様が催すことにした宴会に出席するように、というお触れである。定められた祭りの日になった。その日の、まあ、ご馳走の山といったら。あのタルトやケーキは一体どこから持ってきたのだろう。やわらかい肉の煮込みや、肉や魚のパイ、マカロニやラビオーリ。どれもこれも山盛りあって一隊の兵士がゆうに満腹するほどの量だった。女たちが国中から集まって来ていた。さまざまな女たち、姿かたちも違えば身分も上下さまざま、豊かな者から貧しい者まで、老いた者も若い者も、人に好かれている者から、嫌われている者まで実にさまざまな女たちが集まった。人々がご馳走を食べる口を大いに動か

した後、王様はまず乾杯の声をあげ、そして招かれた女たちの足に次々と例の靴を履かせていった。靴が髪の毛一本の隙間もなくぴったりと合う足を持つ女はいないか、そうやって靴の形に合う足を捜して自分の求める女性を見つけ出そうというのである。しかしその靴に合う足はひとつも現れなかった。王様は絶望寸前だった。

それでも王様は一同に静かにと命じてこう言った。「明日もう一度この場所に集い、私と宴を共にしてくれ。が、家にはいかなる者であろうとも、一人なりとも女を残して来てはならない。」その時公爵がこう言った。「私には娘が一人おりますが、いつも炉端で賄いをいたしております。といたしますのも、人前に出すのはお恥ずかしい、ものの役に立たない愚か者だからでございます。ですからとても陛下の宴席に列席させることなど分不相応でございます。」王様は答えて言った。「そういった者をこそ最前列に据えよ。それが私の望みであり、これは命令だ。」

そこで人々は皆帰宅し、翌日再び集まってきた。今度はゼゾーラもカルモシーナの娘たちと一緒にだった。王様は彼女に目を止めるやいなや、ゼゾーラこそが自分の捜し求めていた娘だということがわかった。しかしそれは心に秘めて、そ知らぬふりをした。食事が終ると、靴を履かせて試す段になった。ゼゾーラの足元近くに靴が持ってこられると、靴は急にひとりで駆け出して、まるで磁石に鉄が引き寄せられるように、かの恋しい娘の足元にすっぽりとはまってしまった。そこで王様はゼゾーラを腕に抱き、そうして天蓋のついた台座の方に連れて行った。そこで王様は彼女の頭に冠を載せ、そして一同に以後后としてゼゾーラを敬うようにと命じたのだった。例の姉妹たちは嫉妬に顔が青ざめ、期待が叶わず失望感に耐えきれないという様でようやくしょんぼりと家に帰り、なおも身のほど知らずなことに母親にこう言った。

運命の星に逆らってまでゼゾーラを後に選んだ王様は間違いだわ。

以上がヨーロッパで文字化された「シンデレラ」として最も古い例のひとつであるが、私たちの記憶に残るおとぎ話の主人公とはかなり異なる印象を与えることであろう。その理由としては、意地悪な最初の継母を家庭教師と結託して殺すという衝撃的な挿話で始まることがあげられる。しかも、この行為に対してゼゾーラは罰を受けることはなく、最後に幸せな結婚を果たすのである。あるいは、家庭教師が主犯格であり、その後、第二の継母となった元家庭教師に迫害されることが、罰として機能しているとも考えられる。また、ゼゾーラが妖精の鳩を呼び出す呪術的能力を備えていることも、彼女を神秘的な存在にしている。何の非もなくいじめられる、哀れで無力な人物像として描かれてはいない。6人の義理の姉たちとは最後まで和解すること

がないのも特徴である。また、父親は初めこそゼゾーラをこの上もなく愛していたようであったにもかかわらず、2 番目の再婚後は娘がそれまでの贅沢な生活から召使い並の悲惨な暮らしぶりになっても、気にもかけないという無責任さである。おそらく、古い伝承の形をよく残していると思われる物語であるが、女主人公の人物造形や父親像が、近代以降の読者の共感を誘うとは言えないかもしれない。しかし、ゼゾーラがどんなに逆境にあっても、自分の望みを実現させる手だてをもっているという隠された力を秘めていることは、きわめて興味深い。

バジーレの物語に比べると、ペローの再話「サンドリヨン」(1694)⁽¹⁴⁾は私たちの多くが記憶に留めている「シンデレラ」にかなり近い。カボチャの馬車、ネズミの馬、どぶネズミの御者、トカゲの下男などの想像力をかき立てる道具立てや、12 時までに帰宅するという妖精との約束、ガラスの靴といった、おなじみのモチーフが見られる。

2. シャルル・ペロー「サンドリヨン」

昔々ある男がいて、またとないほど自惚れが強く、偉ぶった女を二度目の妻として迎えた。女には、性格が何から何まで自分にそっくりの二人の娘がいた。二人を連れて再婚したのである。男の方にも初めの妻との間にできた小さな娘がいた。ところがこの娘は全く違っていた。何とも気だてのよい優しい娘で、それは生みの親から譲り受けたものだった。その母親がまたとない気だてのよい女だったからである。

結婚披露の宴が終わるやいなや、継母のばけの皮ははがれはじめた。継母にはこの姿の愛らしい娘の気だてのよさが我慢ならなかった。というのは娘の気だてがよければよいほど自分の二人の娘がよけいに悪く見えてしまい、この娘を憎む気持ちは増すばかりだったのである。継母はこの娘に家内の嫌わしい仕事ばかりをさせた。皿やテーブルをぴかぴかに磨きあげる仕事、継母の部屋と、そして娘二人の部屋の床までぴかぴかにしなければならなかったのだ。娘はひどい屋根裏部屋の粗末な藁布団で眠ったが、二人の姉妹は流行のきれいな布団にくるまって寝た。部屋の床には象眼が施され、頭のとっぺんから足の先まですっかりうつる大きな姿見までついていた。

かわいそうな少女はどんなことにも我慢強く耐え、父親に言いつけたりはしなかった。言えばきっと娘のことを案じたろうが、今では継母がすっかり父を尻に敷いていたのである。仕事がすむと娘はよく煙突のある片隅に行き燃えさしや灰

の中にうずくまっていた。そのせいで娘は「灰まみれ女」とあざけって呼ばれた。二人の姉妹のうちでも下の方は上の姉ほどには口汚くはなく、また無作法でもなかったが、それでも彼女を「灰まみれのシンデレラ」と呼んだ。シンデレラは粗末な身なりはしていたが、それでも他の姉妹よりは何百倍もきれいな娘だった。彼女達の方がいつも上等のドレスを着ていていたのに。

ある時王子様が舞踏会を催し、その会に身なりの美しい人を招くということになり、この家の娘たちも招かれることになった。彼女らは上流階級の間でもとりわけ異彩を放っていたからである。娘達は招きに大喜びし、自分に似合うガウンやペティコート、髪飾りを選ぶのに大忙しだった。これがまたシンデレラには新しい悩みの種だった。彼女達の肌着にアイロンをかけ、ドレスのひだを上手に作ったりするのはみなシンデレラの仕事だったからである。彼女達は終日どんな格好をして行こうかとそればかりを話していた。

「私はフランス風の縁飾りの付いた赤のベルベットのスーツを着て行くわ。」と姉の方が言うと、妹は、「私はいつものペティコートで我慢するわ。でもその代わりに金色の花の付いたマントを着てダイヤモンドの付いた胸飾りを付けるの。世界中どこを探したってこれほど珍しいものはないわ。」と言う。

近郷の着付け上手を呼んで来させて髪飾りを作らせたり、帽子をうまく被らせてもらい、また赤い羽毛飾りやつけぼくろをおしゃれな婦人小物店から取り寄せたりした。

シンデレラもまた姉妹に呼びつけられ、こういった一切のことの相談を受けた。というのもシンデレラはこういったことにもとても詳しく、姉妹への彼女の勧めはいつも適切だったからである。というよりむしろ、彼女らの方がシンデレラに髪を整えたりすることをしてもらいたがったのである。シンデレラが髪を整えていると、二人は彼女にこう言った。

「シンデレラ、舞踏会に行けるのが嬉しくないの。」

「あら、何てことをおっしゃるの。冷やかさないで下さいな。私など舞踏会に行けるわけがありません。」

これをとらえて彼女らは言った。「確かにそうねえ。舞踏会に灰まみれが現れるなんてみんな大笑いするわねえ。」

彼女らの癖のある髪をきれいにできる上手はシンデレラをおいていなかった。彼女は見事に二人の髪を整えた。二人は招かれる喜びに有頂天になっていてほとんど二日もの間何も食べずに過ごしていた。何とかほっそりと美しく見せるために身体を締め付けようとやっているうちに切れてしまった紐の数は十本を優に越えた。そして鏡の前から離れようとしなかった。ついに幸せな日がやってきた。彼女らは宮殿に出かけた。出て行く二人を目で追いながら、やがてその後ろ姿も見えなくなると、シンデレラは急に泣き出した。

彼女を密かに見守っている妖精はシンデレラが涙にくれているのを見ると、一

体どうしたのかと尋ねた。

「私もできることなら、できることなら、…」溢れ出る涙に声がつまり、その後は言葉にならなかった。

母親代わりに彼女を見守ってきたこの妖精は言った。「おまえも本当は舞踏会に行きたいんだね。」

「ええ。」ため息混じりにシンデレラはやっとのことで答えた。

「じゃあ、いい娘でおいで。おまえが行けるようになんとか私がやってみようじゃないか。」妖精はこういって娘を部屋へ連れて行った。「さあ、急いで畑に行っとかぼちゃを一つ取っておいで。」

シンデレラはすぐさま駆けて行き、一番見栄えのよいかぼちゃを持って妖精のもとに戻ってきた。でもかぼちゃなんかで舞踏会に行けるようになるとはどう考えても思えなかった。妖精がかぼちゃの中身をスプーンですっかり掻き出すと、外側だけが残った。それがすむと魔法の杖を一振りした。するとたちまちかぼちゃは金色に光輝く立派な馬車に姿を変えた。

それから妖精は自分の鼠捕りを見に行った。鼠は六匹生け捕りになっていたの、シンデレラに鼠捕りの蓋を少しばかり押し上げるよう命じた。一匹一匹出てくる鼠に例の魔法の杖を一振りするとたちまち鼠は立派な馬にと姿を変え、美しい鼠色に斑模様をした全部で六頭の第一級の馬車用の馬になった。ところが御者がいないのでうろうろしているばかりだった。

「私がドブネズミの罠を見てくるわ。もしいればそれを御者にすればいいもの。」とシンデレラが言う、と妖精は答えて、

「そうだ、おまえの言うとおりでね。行って探しておいで。」と言った。

シンデレラは仕掛けてあった罠を持ってきた。中には大きなドブネズミが三匹かかっていた。妖精は三匹のうちで一番立派なひげをした一匹を選び出し、魔法の杖を一振りするとドブネズミは太って陽気で、そしてそれまで見たことのないほど格好のよいひげをたくわえた御者になった。

続けて彼女はシンデレラに言った。

「もう一度裏の畑へ行っておいで。水瓶の側にとかげが六匹いるからそれをここへ持っておいで。」シンデレラがすぐさま妖精の言うとおりにすると、妖精はとかげを六人の下男にした。彼らは金銀で飾りたてたお揃いの下男の制服を身に纏い、これまでその他の仕事はしたことがないとでもいうようにすっかり板についた様子で馬車の後ろをお互いにぴったり寄り添って走り始めた。そうして妖精は今度はシンデレラに言った。

「ごらん、舞踏会に行くのにふさわしい馬車が揃いすっかり出来上がった。気に入ったかい。」

「ええ、もちろんだわ。でも、あれにのって私はこんな格好で行かなくてはいけいいのかしら。こんな汚いぼろを纏って。」

妖精が魔法の杖で軽くシンデレラに触れると彼女の着ていたものはたちまち宝石のたくさん付いた金糸銀糸のドレスにと変わった。これがすむと妖精はシンデレラに世界中で一番きれいなガラスの靴を与えた。こうして美しい装いの準備ができるとシンデレラは馬車に乗り込んだ。このとき妖精はとても大切なことをシンデレラに注意して言った。真夜中を過ぎるまで舞踏会にいてはいけない。真夜中を一瞬たりとも過ぎれば、馬車は元のかぼちゃに戻り、馬も皆元のはつかねずみに、御者もただのどぶねずみ、下男もとかげに戻ってしまい、そしてシンデレラ、おまへのドレスも元の汚いボロスカートに戻るだろう、と。

シンデレラは、妖精にきつと真夜中にならないうちに舞踏会から戻ってくると約束した。そして、喜びに胸がはちきれんばかりの思いで馬車に乗って走り去って行った。誰も知らないけれどすばらしい王女がやってきたと聞いた王子は、王女を出迎えるために走り出た。王子は馬車から降りる王女に手を貸し、そして人々の皆集まるホールへと王女を案内した。するとたちまちホールはぴたりと静まり返った。人々は踊るのをやめ、バイオリン弾きは演奏の手を止めた。皆こぞって突然に現れたこれまで見たこともないほどに美しい王女が一体誰なのかと考えをめぐらした。聞こえるのは驚きと、一体誰かといぶかる声ばかりだった。「なんときれいな王女なのだろう。本当にきれいだ。」

年老いた王様さえ王女をまじまじと見つめないではいられなかった。そして側にいた女王に、こんなにも美しいかわいらしい女性を見るのは本当に久しぶりのことだと小声で言った。

舞踏会に招かれている女性達は皆シンデレラのドレスや髪飾りの品定めに忙しかった。あれほど上等な布や仕立ての腕を持った職人が見つかるなら、明日にでも同じデザインで自分もドレスを作らせようと思うからだ。王子はというと、彼女を主賓の席に連れて行き、その後で一緒にダンスを踊った。彼女の踊りはこのうえもなく優雅だったので人々はますます彼女を誉めた。軽い食事も振舞われたが、王子の喉には一かけらも通らなかった。ただ王女をじっと見つめるばかりだったからだ。

シンデレラは自分の姉妹のもとに行って一緒に座り丁重に挨拶を交わした。そして王子さまが彼女にくれたオレンジやレモンを分け与えたが、彼女らはとても驚いた顔をした。彼らには彼女が誰か解らなかったからである。こうしてシンデレラは自分の姉妹を楽しませていたが、そのとき時計が11時45分を打つのが聞こえた。すると彼女は慌てて立ち上がり、皆に丁寧に別れの挨拶をし、そして走らんばかりに急いで立ち去って行った。

家に帰るとシンデレラは妖精を探した。妖精に礼を述べると彼女は、できれば次の夜も舞踏会に行きたいと本当は思うと打ち明けた。王子様がそうしてくれと言ったと言うのである。

シンデレラが妖精に舞踏会で起こったことを熱心に話していると、二人の姉妹が

ドアを叩く音がしたのでシンデレラは走って行ってドアを開けた。

「まあとても遅かったのね。」まるでたった今眠りから覚めたかともいうようにあくびをしたり、目を擦りながら彼女は言った。もちろん、彼女らが出かけてから眠りたいような気になったことはさらさらなかったけれど。

「もしおまえが舞踏会の場にいたなら退屈するなんてことはなかったろうに。舞踏会にはすばらしく美しい王女様が来ていたのよ。この世の人とは思えないほどきれいな方だったわ。その方が私たちにはとても親切だったのよ。オレンジやレモンをくださったりしたの。」

シンデレラはこのことには全く関心を示さない風だった。その王女の名前を聞くと彼女らは解らないと言い、また、王子はその王女のこと何れも解らないのにいらだち、国中に王女が誰かを調べるようおふれを出すのだと語った。これを聞くとシンデレラは微笑んでこう言った。

「まあ、それならその王女様は本当にきれいな方なのねえ。そんな方を見られて本当によかったわねえ。私も一目見られないかしら。ねえ、シャーロットさん、あなたの普段着の黄色いドレスを私に貸して下さいな。」

「自分のドレスをおまえみたいな灰まみれに貸すですって！そんなことをすれば私は本当の大馬鹿になっちゃうわ。」

シンデレラは、実は、おそらくそういう返事が返ってくると思っていたので、断わられて幸いだった。冗談で頼んだドレスを本当に貸してくれたらいやでもそれを着なくてははいけなかったからだ。

次の日二人の姉妹は舞踏会に出かけた。シンデレラもまた出かけたが、今度はさらに立派な装いをして行った。王子様は彼女の側から一時も離れず、絶え間なく彼女を誉めそやす言葉を言い続けた。王子様の言葉はいくら聞いても飽きることがなかったので、シンデレラは妖精の忠告をついうっかりと忘れてしまった。だからまだ11時だとしか思っていなかった時計が12時を打つのを聞いたとき、シンデレラは立ち上がってまるで小鹿の様にすばしっこい身のこなしで駆け去ってしまった。王子は追いかけたが彼女を離えることはできなかった。彼女はうっかりガラスの靴の片方を落としてしまい、王子はそれを大事そうに拾い上げた。息絶え絶えに家に辿り着いたが、美しい装いは何も残らず元の汚い衣服に戻ってしまっていた。ただ落とした靴の片われの小さなガラスの靴だけは残っていた。宮殿の門番は王女を見かけなかったかと聞かれたが門番はこう答えるばかりだった。

「汚いなりをした少女が一人通っただけ、それ以外は誰も見かけませんでしたね。そのむすめはどう見ても貧しい田舎娘で立派な御婦人の身なりではありませんでしたよ。」

二人の姉妹が家に戻るとシンデレラは楽しかったかと尋ね、また例の立派な御婦人も舞踏会に来ていたかと尋ねた。

「ええ、でも王女様 12 時が鳴ると慌てて駆け去って行かれたの。あんまり急いでいらしたので世界一きれいでかわいらしいガラスの靴の片方を落としてしまったの。王子様がそれを拾われたけれど。王子様ったら舞踏会の間中王女様を見ているばかりなの。あれはきっとあのガラスの靴の持ち主の美しい方に恋していっちゃるんだわ。」

彼女らの言ったことは確かだった。それから数日たつと、王子は命じてトランペットの音で例の靴にぴたりと入る足を持った女性と結婚すると宣言したからである。王子の命を受けた家来の者が王女たちや公爵夫人、それから宮廷の者皆に靴を試しに履かせてみたが足の合うものは一人もいなかった。靴は二人の姉妹のもとにも持ってこられ、二人はなんとかして足を靴にすべり込ませようとやってみたが無駄だった。これを一部始終見、それが自分の靴だと知っているシンデレラは笑いながら二人にこう言った。

「私に試しに履かせて下さい。」

二人の姉妹はふきだして大笑いし、そして彼女を冷やかし始めた。靴を試すのに送られてきた紳士はシンデレラの顔をじっと見ると彼女がとてもきれいなので、誰にも靴を試しに履かせてみよという命を受けているのだからシンデレラにも履かせてみるようにと言った。

紳士はシンデレラを椅子に座らせ靴を足に履かせてみると、靴はいとも簡単に彼女の足にはまり、まるで蠟でもできているかのように彼女にぴたりと合うのだった。二人の姉妹の驚きはかなりのものだったが、シンデレラがポケットからもう一方の靴を取り出して履いて見せたときの衝撃はそれにもまして大きかった。その時これまで母親代わりにシンデレラを見守ってきた例の妖精が現れ、魔法の杖でシンデレラの着物に触れると、それまでにもまして豪華ですばらしいドレスになった。

二人の姉妹はようやくシンデレラが舞踏会で見かけたあの立派な美しい婦人だということが解った。二人はシンデレラの足元に身を伏してこれまで彼らが彼女に耐えさせてきた過酷な扱いを詫びた。シンデレラは二人の手をとって立たせ、二人を抱きながら自分も泣いて心から彼らを許すと言い、そしてこれからはずっと自分を愛してくれるようにと言った。

その装いのままシンデレラは王子のもとに連れて行かれた。王子は彼女をこれまでも増して美しいと思い、その数日後二人は結婚した。美しいだけでなく気だても優しいシンデレラは二人の姉妹に宮殿の中に住む場所を与え、その日すぐに二人の立派な領主とめあわせた。

ペローの再話の特徴は、シンデレラの気だての良さが強調されている点であろう。継母が彼女につらく当たるのも、シンデレラの姿の愛らしさと気だ

ての良さに比べて、自分の娘たちが見劣りするため、というあるていど納得のいく理由が示されている。結末で、シンデレラはふたりの義姉たちを許すのみならず、宮殿の中に住まわせ、結婚相手を見つけてあげるほど、「美しいだけでなく気だても優しい」とされている。キリスト教的慈愛と博愛精神に満ちた女性であることがわかる。すなわち、ペローは、気だての良さは女性に幸福を招くと主張したいのであろう。「赤頭巾」で女性の逸脱を厳しく戒めたことからわかるように、ペローは女性のモラルやあるべき姿をおとぎ話によって提示する意図をもっていたように思われる。男性像については、父親が再婚した妻の言いなりになっていることから、余り重要視されていないことがわかる。

ペローの再話は、文学的にも洗練されている印象を受けるが、現代の私たちから見て、あれほど理不尽な扱いをされたシンデレラが、あまりにも寛容に姉たちと和解してしまう結末を読んで、意地悪な姉たちが何の罰も受けないことに不満を感じざるを得ない。おそらくグリムも同様の感想を抱いたことであろう。彼の編集した「シンデレラ」(1857)⁽¹⁵⁾は、姉たちへの報復で幕を閉じる。

3. グリム「シンデレラ」

ある裕福な男の妻が病気になってしまった。自分の死期が近いと思った妻は一人娘を枕元に呼んでこう言った。「神様を信じてよい子にしているのよ。そうすればやさしい神様がいつも一緒にいてお前を守って下さるだろうから。そして私も天国からお前を見ているからね。私はいつもお前のそばにいるよ。」そうして妻は目を閉じると亡くたってしまった。娘は来る日も来る日も母親の墓に出かけてはそこで涙を流し、神様に祈りよい子でいるよう努めた。冬になると墓の上が雪で真っ白になり、春がきて陽射しが雪を解かし去ってしまうと、夫の男の方は二度目の妻を迎えた。

新しい妻は自分の二人の娘を連れてやって来た。娘たちは顔はきれいで色白だったが、心ば醜く腹黒かった。こうして継子にとっては辛い日々が始まった。「馬鹿ながちょうが私たちと一緒にこの居間に座するというの。」といったり、「パンを食べたいのならその分を自分で稼ぐことね。台所女はさあ、出ておいき!」と言い、娘の着ていたきれいな服を脱がせ、代わりに古いネズミ色の仕事着と木靴を履かせた。「誇り高きお姫様を見てご覧よ。あの娘が今着ているあの服と言ったらまあ!」こう言って二人の娘たちは叫び声をあげ、笑いながら彼女を台所へ連れ

て行った。娘は台所で朝から晩まで辛い仕事をし、朝は夜明け前に起き出し、水運び、火をつけ、煮炊きをし洗い物をした。そればかりか二人の姉達は娘にあらん限りの意地悪ないたずらをしかけたりあざけったりしたのだった。例えば灰の中に小さな豆を投げ込み、それを座って一つずつ拾い出す、というようなことをさせたのである。仕事に疲れ果てても娘にはベッドもなく、暖炉の側の灰の中にうずくまるしかなかった。そのためいつも煤けて汚いなりをしていたので娘は灰かぶりと呼ばれたのだった。

ある時たまたま娘の父親が市に出かけることになり、妻の連れてきた二人の娘たちにおみやげには何が欲しいかと尋ねた。「きれいな服がいいわ」と一人が言った。「真珠と宝石」ともう一人が言った。「さて、お前はどうかい、灰かぶり。何が欲しいか言ってごらん。」「お父様、帰り道でお父様の帽子に最初に触った小枝を折って私におみやげに持って帰って下さいな。」そこで父親はきれいな服や真珠、宝石を二人の義理の娘たちのために買い求めた。緑の深い小道を家に向けて馬を走らせているとヘーゼルの小枝が体に触れ、それにひっかかった帽子が落ちてしまった。父親はその小枝を手折り、ともに持ち帰った。家に着くと二人の娘たちには望みの品々を、そして灰かぶりには例のヘーゼルの小枝を与えた。彼女は父親に礼を言うと、小枝を持って自分の母親の墓に行き、そのそばに小枝を植えた。あんまり激しく泣いたので、彼女の涙が植えた小枝の差し水になってしまった。小枝はたちまち大きくなり、そして立派な木に育った。一日に三度少女はそこを訪れ、泣きながら祈った。その度に小さな白い鳥が木に止まった。彼女が自分の欲しいものを口にする度に小鳥は望みのものを彼女に放り投げしてくれるのだった。

さて、王子が花嫁を選ぶ時期になったので王様は三日に渡るパーティーを催して、国中の美しい娘たちを招くことにし、そのお触れを出した。これを聞くと二人の姉達もまたそのパーティーに出かけようとうきうきし始め、灰かぶりを呼んでこう言った。「私たちの髪をといて！靴も磨くのよ。それから靴の留め金も止めるの。私たちは王様の宮殿で開かれるパーティーに出かけるんだから。」灰かぶりは何も言わずに彼女らの言う通りにしたが、ひとり泣いていた。彼女だって舞踏会には行きたかったのだ。そこで継母に行かせてくれるよう頼んだ。「まあ、お前みたいな灰かぶりが。挨だらけで汚い格好をしているじゃないか。それに舞踏会に着て行くような服や靴は持っていたいじゃないか。」しかし、あんまりしつこく娘が頼むので継母はついにこう言った。「さっき灰の中に小さな豆の入った皿をひっくり返してしまった。その豆を二時間のうちに全部拾い集めたら、お前も一緒に来ていいとしよう。」娘は勝手口から庭に出てこう叫んだ。「おとなしい家鳩よ、山鳩、そしてこの世の小鳥たちよ、みんな来て私を手伝ってちょうだい。灰の中から豆を拾い出すの。そうして、

きれいな豆は壺に入れておくれ。

よくない豆はお前たちにあげる。

すると家鳩が二羽台所の窓から飛び込んで来、続いて山鳩が、そしてこの世の全ての鳥とも思えるほどの小鳥が集まって来てかまどの灰の回りに止まった。まず家鳩が頭をぴよこぴよこ動かしながら豆を一つずつついばみ始めると他の鳥たちもそれに続き、せっせときれいな豆を皿に入れ始めた。すると一時間もたたないうちにすっかり片づいてしまい、小鳥たちはまた飛び去って行った。そこで娘は大喜びで皿を継母の所に持って行った。今度はパーティーに連れて行ってもらえると思ったからだ。しかし、継母はまたもや駄目だと言うのである。「灰かぶり、お前はきれいな服も持っていないし、それにダンスだってできないじゃないか。それで行こうものなら皆の笑いものになるだけさ。」娘が泣き出すと継母はこう言った。「もし一時間のうちに今度は二皿分の豆を灰の中から拾い出すことができれば一緒に来てもよいということにしよう」こう言いながらも継母は「そんなことが娘にできるわけがない」と思っていたのだった。継母が二皿分の豆を灰の中に入れると娘は勝手口から裏庭に出てこう叫んだ。「おとなしい家鳩よ、山鳩、それにこの世のすべての小鳥たちよ、みんな来て私の豆拾いを手伝ってちょうだい。」

きれいな豆は壺に入れておくれ。

よくない豆はお前たちにあげる。

すると白い家鳩が二羽台所の窓から飛び込んで来、それに続いて山鳩や、そしてついにはこの世の鳥すべてと思えるほどの小鳥がやってきてかまどの灰の回りに止まった。まず家鳩が頭をぴよこぴよこ動かしながら豆を一つずつついばみ始めると他の鳥たちもそれに続き、せっせときれいな豆を皿に入れ始めた。すると半時間もたたないうちにたちまちすっかり片づいてしまい、小鳥たちは再び飛び去って行った。そこで娘は皿を継母の所に持って行った。今度こそはパーティーに連れて行ってもらえると思うととても嬉しかった。ところが継母は「だめだめ。お前は来ちゃだめさ。着物もないし、ダンスだってできないじゃないか。お前なんかを連れていると私たちが恥ずかしい思いをするよ。」こう言うと継母は娘に背を向けてしまい、自分の高慢ちきな二人の娘を連れて急いで出かけて行ってしまった。

誰も居なくなってしまうと、灰かぶりはヘーゼルの木の下の自分の母親の墓のもとに行きこう叫んだ。

かわいい木よ、ぶるぶるっとお前の幹を揺さぶってごらん。

そうして私の回りに金銀を落しておくれ。

すると小鳥が飛んで来て彼女に向かって金糸銀糸でできたドレスと銀糸の刺繍のついた靴を落としてくれた。娘は急いでドレスを身につけパーティーへと向かった。金色に輝くドレスを身につけた娘はたいへん美しく、義理の姉達やら継母もまさかそれが灰かぶりだとはちっとも気づかず、きつとどこか外国からやって来た王女に違いないと思うばかりだった。灰かぶりは家の炉端で埃にまみれてせっ

せと灰の中から豆を拾い出しているものとしか思わなかったからである。王様の息子がやって来て彼女の手をとってダンスを踊ったが、他の娘達とは踊ろうとしなかった。王子は娘の手を放そうとせず、他の誰かがやって来て娘に踊りの相手をと申し込んでも、「だめだ。彼女は私の相手だ。」とつっぱねるのだった。

娘は夜まで踊ると家に帰ろうとした。すると王子はこう言った。「私がお宅までお送りしましょう。」王子はその美しい娘がどういう人物の娘なのかを知りたいと思ったからである。しかし娘は王子の手をするりとかわして鳩の小屋に飛び込んだ。王子は娘が鳩小屋から出て来るのを待っていたが、やがて娘の父親がやって来ると、外国人みたいな娘が鳩小屋の中に入ってしまったと話した。娘の父親は「灰かぶりだろうか、まさか。」と思った。斧とつるはしを取って来て鳩小屋を壊してみたが中には誰もいなかった。娘の父親たちが家に帰ってみると灰かぶりは例の汚い服を着て灰まみれでうずくまっており、炉端にはぼんやりとランプの明りがともっていた。実は灰かぶりは鳩小屋の裏手から飛び出すと一目散にヘーゼルの木のもとまで駆けて行き、そこできれいな服を脱いだのである。服を母親の墓の上に置くと小鳥たちがやってきてそれを持ち去った。そうして娘はいつもの灰色のスモックを着て台所の灰の中にうずくまっていたのである。

翌日も続いてパーティーが開かれ、娘の親達と義理の姉達は共に出かけていった。灰かぶりは再びヘーゼルの木のもとに行き、こうつぶやいた。

かわいい木よ、ぶるぶるっとお前の幹を揺さぶってごらん。

そうして私の回りに金銀を落しておくれ。

すると小鳥が飛んで来て前の日よりももっと美しい服を娘にくれた。娘がこの服を着てパーティーに現われると人々はあまりの美しさにあっけにとられてしまった。彼女が来るのを待ち望んでいた王子はすぐさま手を取り、彼女とばかり踊るのだった。他の誰かがやって来て娘に踊りの相手をと申し込んでも、王子は「だめだ。彼女は私の相手だ。」とつっぱねるのだった。夕方になり彼女が帰宅しようとするすると王子は娘がどの家に入るのかを突き止めようと後をつけてきた。しかし、娘は駆け出して王子をうまくまき、家の裏庭へとかけ込んだ。そこには立派な高い木が立っていて、大きな梨の実をたくさんつけていた。娘はまるでリスのようにするすると梨の木に登ってしまったので王子は彼女がどこに行ったかわからなくなってしまった。王子が木の下で待っていると娘の父親がやって来た。王子は「不思議な娘が私の手をすり抜けてどうやらこの梨の木に登ってしまったらしい」と言った。父親は「灰かぶりだろうか、まさか。」と思ったが、斧を取らせて梨の木を切り倒してみた。しかし誰もいなかった。台所に入ってみると灰かぶりはいつものように灰にまみれて座っていた。実は娘は梨の木の反対側に降りるときれいな服はヘーゼルの木の小鳥に返し、元の灰色のスモックにすばやく着替えたのだった。

三日目も、親達が二人の姉達を連れて出かけて行くと灰かぶりは自分の母親の

墓のもとに行き、木にこう頼んだ。

かわいい木よ、ぶるぶるっとお前の幹を揺さぶってごらん。

そうして私の回りに金銀を落しておくれ。

すると例の小鳥が前よりさらに素晴らしく、これまで誰も着たことのないほどまばゆいばかりのドレスと純金でできた靴をくれた。このドレスを身につけてパーティーの席にやって来ると、皆あまりの驚きに声も出なかった。王子は娘とだけ踊り、他の誰かがやって来て娘に踊りの相手をと申し込んでも「いやいや、彼女は私の相手だからだめだ。」とつぶねるのだった。

夜になると灰かぶりは家に帰りたと思った。王子は娘を家まで送って行きたいと思ったが、娘があんまりすばやく王子の手を逃れたので見失ってしまった。しかし王子はちょっとした細工をしておいたのだった。というのは階段に松やにをつけておいたのである。だから娘が階段を駆け降りたとき娘の左側の靴がくっついてしまった。王子がその靴を手に取り上げてみると、それは小さくて瀟洒な作りでおまけに純金でできていた。翌朝王子はその靴を持って家来のところに行きこう言った。「私の妻になるのはこの靴にぴったり合う足を持った娘しかない。」これを聞いて二人の姉達は大喜びした。というのも二人は足が自慢だったからである。姉の方が靴を持って自分の部屋に行き履いてみようとした。母親も付き添って側に立っていたが、足先が大きすぎて入らなかった。靴が小さすぎたのである。すると母親は娘にナイフを手渡してこう言った。「足の指なんか切っておしまい。お妃になれば歩かなくなたっていいのだもの。」姉は指を切ってしまうと足を靴に押し込んだ。そして痛みをこらえながら王子のいる場に出て行った。王子は娘を自分の馬に乗せると共に出発した。ところが二人が墓の側を通り過ぎようとするとヘーゼルの木に止まった二羽の鳩がこう叫んだ。

見てごらん、見てごらん！

お靴の中は血だらけさ！

お靴が小さすぎるのさ！

ほんとの花嫁はまだおうち！

そこで王子が娘の足元を見ると血がにじみ出ているのが目に入った。王子は馬を返して偽物の花嫁を娘の家に連れて戻りこの娘は本当の花嫁ではないと言うと、もう一人の娘に靴を履かせてみるように言った。そこでもう一方の娘が自分の部屋で靴を履いてみた。ところが足先はなんとかうまく入ったが、今度は踵が大きすぎた。すると母親がナイフを手渡してこう言った。「踵をちょっぴり切りとればいいさ。お妃になれば歩かなくなたってすむのだもの。」娘は踵を少し切り落とし足を靴に押し込んだ。そうして痛みをぐっところえながら王子のもとに歩みでた。王子は娘を花嫁として自分の馬に乗せて出発した。二人がヘーゼルの木を通り過ぎ

ようとすると、例の二羽の鳩が木に止まってこう叫んだ。

見てごらん、見てごらん！
お靴の中は血だらけさ！
お靴が小さすぎるのさ！
ほんとの花嫁はまだうち！

王子が娘の足元に目をやると靴から血がにじみ出ているのが見えた。娘の白いストッキングが真っ赤に染まっているのである。そこで王子は馬を返し、偽の花嫁を家に連れ帰って言った。「この娘も本当の花嫁ではなかった。他には娘はいないのか。」「おりません。前妻の忘れ形見で灰まみれの困りものがあるにはいますが、そんな者がその花嫁とはとうてい思えません。」と父親の男は言う。王子は男にその娘を連れて来るよう言ったが母親の方が答えて、「いいえ、とんでもございません。あれは埃まみれの娘でお目にかけべきものではございません。」けれども王子があんまり強く言うのでとうとう灰かぶりを呼ぶことになった。娘は顔と手をよく洗うと出て行って王子の前で恭しく深いお辞儀をした。王子は娘に例の靴を手渡した。娘が丸椅子の上に座り、重い木靴から足を抜いて渡された靴に滑り込ませると、なんと見事にぴったりだった。立ち上がった娘の顔をよく見ると、王子はそれが自分とダンスを踊ったあの美しい娘だということがわかった。「あれが本物の花嫁だ！」王子は叫んだ。継母と二人の姉は驚き、いまいましさに真っ青になった。王子は灰かぶりを自分の馬に乗せると立ち去って行った。二人がヘーゼルの木の側を通りかかると白い鳩がこう叫んだ。

見てごらん、見てごらん！
お靴に血なんか出てないよ！
お靴のサイズもぴったりよ！
連れているのは本当の花嫁。

こう歌うと二羽の鳩は飛んで来て、灰かぶりの肩に止まった。一羽は右肩にそしてもう一羽は左肩に止まりそのまま乗って行った。

王子との結婚を祝う式が催されると二人の義理の姉達を取り入れるためにやって来た。灰かぶりの幸運のおこぼれにあずかろうと思ってのことだった。結婚する二人が教会へ向かうとき上の姉は右側を、下の姉は左側を歩いた。すると鳩が姉達の目をそれぞれ一つづいばんだ。二人が教会から出てきた時も、姉は左、妹は右を歩いていたが、今度も鳩が二人の残ったもう一方の目をついばんだ。こういうふうに、二人の姉達は自分達の邪な心と策略のために罰を受け、盲しいたまま一生を送ることになったのである。

グリムの再話はペローのものよりも、むしろバジールに近く、おそらく古い原話の雰囲気を与えていると考えられる。ここには、カボチャの馬車やガラスの靴、12時までに帰宅という、なじみのモチーフが欠けている。シンデレラは呪術的な能力を備え、継母の課す難題にも鳥たちを呼び寄せて対処できる。家庭内で不当な扱いを受けているとはいえ、王子の花嫁選びのパーティに行きたいと思えば、どうすれば自分の願いが叶えられるかを知っており、豪華なドレスを調達できる。ペローのシンデレラがひとりで泣いていると母親代わりの妖精が現れてどうしたのかと尋ねて助けてくれるのに比べると、はるかに自主的に行動する。不思議な力を備えた神秘的な人物像として造形されている。

また、グリムでは亡き母親の保護と助力が顕著であるのも大きな特徴である。冒頭で死期を悟った母は娘に「私はいつもお前のそばにいるよ」と言い残し、娘も毎日母の墓に出かけて祈る。シンデレラの超自然的能力は母親の墓を中心に発揮されるし、一般に鳥は死者の魂そのもの、または魂の運び手としての役割を担うことが多い。すなわち、「神様を信じてよい子にしている」ようにとの母親の言いつけを忘れずに守ったシンデレラは、母が予言したように「神様が守って下さり、幸福を手に入れることができたのである。」「赤帽子ちゃん」と同様に、母親の教育の重要性を強調し、それに従うことが娘としてあるべき道（そして幸せへの道）であるというメッセージが込められている。

一方、母親の存在感に比べて父親像が明確でないが、「灰まみれの困りもの」と呼んでいるところから、前妻の娘を疎んじている様子が窺われる。しかし、継母に比べて父親が悪役として描かれないのは、父親像がいわば治外法権化されているとも考えられる。グリム全話のデータベースを使った研究によれば、「王」は816回、「王妃」が161回で、「父」は424回、「母」は262回登場し、男性の活躍が目立つ一方で、「悪い」と形容される回数は男性が23回、女性が36回で、女性が「悪い」とされる頻度が高いという⁽¹⁵⁾。「シンデレラ」でも、家族内での不当な扱いの元凶は継母と義姉たちとされ、父親の責任は不問にされている点に「悪いのは女」というメッセージを読みとることができる。

さらに、グリムの特徴は結末での義姉たちの哀れな末路である。ペローのシンデレラがキリスト教的な許しと博愛精神を示したのとは対照的に、グリムでは概して厳しい報復で悪を罰するという発想が顕著である。もっとも、ペローは「赤頭巾ちゃん」では女性の逸脱行動を罰し、狼の責任を不問にし

ているので、女性は自分には厳しく、他人には寛容でならねばならぬ、と強調していると解釈できる。「赤帽子」と「シンデレラ」において、グリムでは性別にかかわらず、悪役は厳しく断罪される点で、ペローよりも公平と言えるかもしれない。

現代の読者になじみのある「シンデレラ」は、グリムではなく、ディズニーが1950年代に書き直した版であることが多い。ディズニーは19世紀のグリムではなく、17世紀のペローを元としている。その理由として、ペロー版には、カボチャの馬車やガラスの靴といった、視覚的喚起力の強いイメージが多用されているために、絵本や映画には効果的であることがあげられる。しかし、ディズニーがペローに準拠したのは、グリムの描いた超自然的な能力を身につけた神秘的な（ある意味で不気味な）女性よりも、20世紀にふさわしい（とディズニーが考えた）愛らしいシンデレラ像が作りやすかったためとも考えられる。20世紀版「シンデレラ」は以下のような物語である⁽¹⁶⁾。

4. ウォルト・ディズニー「シンデレラ」

昔、心の優しい、美しい女の子がいました。お母さんが亡くなってからずっと、広い屋敷にお父さんと二人きりで、暮らしていました。仲良しは、犬のブルーノと白い馬です。しばらくすると、新しいお母さんが二人の大きな娘を連れてこの屋敷にやって来ました。

やがて、お父さんが病気で亡くなってしまうと、二度目のお母さんもお姉さんたちも意地悪ばかりするようになりました。女の子は、粗末な身なりで、朝から晩まで掃除、洗濯、食事の支度などをしなければなりません。夜は薄暗い部屋で眠り、寒い晩は暖炉の灰の中に足を入れて暖めます。いつも、灰だらけだった女の子はみんなから「シンデレラ(灰かぶり)」と呼ばれました。でも、シンデレラはどんなにつらくても、素直な心を失わず、小鳥たちの歌声に慰められて働いていました。シンデレラの友達は、小鳥たちの他にもまだいます。屋根裏に住むネズミです。(中略。シンデレラはネズミを罠から助け出したり名前を付けたりする)朝の仕事はまず、鶏に餌をやることです。(中略)

その頃、シンデレラは台所で次の仕事にかかっています。リン、リン、リン、呼び鈴がせわしく鳴り出しました。お母さんと二人のお姉さん―ドリゼラとアナスターシャが呼んでいるのです。「はい、はい、すぐに行きます」「何をぐずぐずしてるの」「早くしなさいよ」「はい、ただいま」シンデレラは二階の寝室に三

つのお盆を運びます。お母さんとお姉さんたちはこれからゆっくりと朝の食事をするので。

その頃、お城の中では年取った王様が大臣を相手にしきりに嘆き悲しんでいました。「ああ、王子はなぜ早く良い相手を見つけて結婚する気にならんのか。わたしは待ちくたびれた」「生きているうちに、かわいい孫の顔を見たいのじゃ」王様はしくしく泣き出しました。すると大臣が言いました。「私に良い考えがございます」

それからまもなく、国中の若い娘のいる家にお城から使いがやって来て手紙を届けて回りました。その手紙はシンデレラのところにも、恭しく届けられたのです。「これは王様からのご招待です。お城でダンスの会が開かれることになりました。なんでも王子様もお出ましになるとか」「まあ、すてき」

「--お城で開かれるダンスの会には国中の若い娘が一人残らず招かれる」お母さんはその手紙を読み上げました。お姉さんたちは手をたたいて大はしゃぎです。そこで、シンデレラは言いました。「あのう、私も一緒に連れて行って下さるかしら」「ええ、いいですとも」お母さんは意地悪く答えました。「だが、仕事はきちんと片づけるんだよ。それに、着ていくドレスがあればね」

シンデレラは屋根裏部屋に戻って大切にしまっておいたドレスを取り出してみました。「私にはこれしかない。亡くなったお母様の形見よ。新しい形に直さなくてはね」でも、ドレスを直す暇はなかなかありません。お母さんたちは山のように仕事を言いつけます。「かわいそうなシンデレラ。古いドレスを作り直す時間がないんだ」「僕たちが代わりになんとかしてあげようよ」（ネズミや小鳥たちがドレスを仕上げてくれる）

シンデレラがやっと仕事を済ませた時にはあたりはもう暗くなっていました。「とうとうドレスは間に合わなかったわ。私も踊りに行きたかったのに」「シンデレラ、こっちを見てごらん」ネズミや小鳥たちに呼びかけられて振り向くと、そこには見違えるように美しくなったドレスと首飾りが揃えてありました。「まあ、なんてすてきな。ありがとう。みなさん。なんてお礼を言ったらいいのか」そして、急いで支度をしてお姉さんたちのところへ走って行きました。ところが、お姉さんたちは大騒ぎです。「あら、これは私のリボンよ」「私の首飾りを返さない」お姉さんたちはシンデレラのドレスをぼろぼろに破いてお城へ出かけてしまいました。

シンデレラは独りになるとわっと泣き出しました。するとどこからか、不思議なおばあさんが現れて優しく声をかけました。「泣くのはおよし。さあ、涙を拭くのよ」「まあ、いったいどなた」「私はおまえの名付け親の妖精よ。いつも見守っていたの。お城のダンスに行きたいのだね」「ええ、とっても」「では望みをかなえてあげよう」妖精はかぼちゃを一つ持ってこさせると、魔法の杖をさっと振りました。するとたちまち、かぼちゃは馬車になりました。次に妖精はネズミたち

に向かって杖を振りました。あっという間に、見事な四頭の馬になりました。仲良しの馬は御者に、犬のブレーノは家来に。そしてシンデレラのみすぼらしい服も、目の覚めるような美しいドレスに変わったのです。最後に妖精はシンデレラにきらきら光るガラスの靴を履かせてくれました。「さあ、行っておいで。でも、夜中の12時までには必ず帰ってくるのよ。魔法が解けてしまうからね。忘れないで、12時を過ぎないように気をつけて」「はい、わかりました。行ってまいります」シンデレラは何度もお礼を言って、馬車に乗りました。馬車はやがてお城に着きました。

大広間から人々のざわめきが聞こえます。まもなく、ダンスが始まるのでしょうか。シンデレラは胸をドキドキさせながら、お城の階段を上がっていきました。「おお、あの美しい娘は誰かな。王子が気に入った様子じゃ。皆の者、音楽を始めよ」王子とシンデレラは一目でお互いが好きになりました。美しいワルツの調べに乗って、二人は時の経つのも忘れて踊り続けました。シンデレラが気がつくと、もう12時です。「たいへん、急いで帰らなくては」慌てて走り出した途端に、ガラスの靴が片方脱げてしまいました。

ゴーン、ゴーン、ゴーン。お城の時計が大きく鳴り響きます。「早く、早く、魔法が解けてしまうわ」やがて時計が12時を打ち終えると、すべてが元の姿に戻ってしまいました。馬車はかぼちゃに、馬はネズミに、美しいドレスはみすぼらしい服に。ただ、ガラスの靴の片方だけが、そのままシンデレラの足に光っていました。

お城では王様が深々と椅子に腰を下ろして夢を見ています。王子とあの美しい娘が結婚して、かわいい孫ができたという夢を。「たいへんでございます」大臣の声に、王様ははっと目を覚ましました。あの娘さんが突然どこかに消えてしまいました。残されたのはこのガラスの靴だけでして」「えい、何をしておる。早く国中を探すのじゃ」

ガラスの靴が足にぴったり合う娘を王子の花嫁にするというお触れが回ってきた日の朝。お母さんはお城で聞いたワルツをシンデレラが歌っているのに気づきました。では、王子様と踊っていたのはシンデレラ。そうと知ったお母さんはシンデレラを屋根裏部屋に閉じこめて鍵をかけてしまいました。「泣かないで。すぐに助けてあげるから」ネズミが慰めます」下の部屋では、お姉さんのドリゼラがお城から回ってきたガラスの靴を履こうとしてうなっています。その間にネズミたちが大活躍。(中略)さて、ガラスの靴はドリゼラにはどうしても小さすぎて履けませんでした。そこで、アナスターシャが試してみましたが、大きな足を無理矢理に押し込んだので、靴はこなごなに壊れてしまいました。「おお、大切な靴が」大臣たちが困っていると、ネズミたちに助け出されたシンデレラが現れ、にっこり笑って言いました。「ご心配いりませんわ。もう片方の靴がここにあります」そのガラスの靴はシンデレラの足にぴったりでした。「このお方こそ、王子様

の花嫁様だ」

こうして、シンデレラは王子と結婚式を挙げることになりました。「よかった、よかった。これでわしも、一安心じゃ」王様も大臣も大喜び。シンデレラの仲良しのネズミたちも結婚式にやって来て、みんなでお祝いをしました。「おめでとう、シンデレラ」「いつまでも、幸せにね」そして二人はいつまでも幸せに暮らしました。

どんなに貧しくても、大成功して幸せになるチャンスがあるというアメリカン・ドリームのヴァリエーションとして、「シンデレラ」物語は国民的な支持を集めてきた。しかし、ジェーン・ヨーレンが指摘する⁽¹⁷⁾ように、「シンデレラ」は極貧から富に駆け上る娘の話ではなく、失われていた富を取り戻す話である。すなわち、古代ギリシアにまで遡る「ロマンス」形式--高貴な両親のもとに生まれながら、様々な事情から身分や相続権を剥奪されるが、試練の後、身元が判明して本来の地位と富を回復する--の末裔と言えるであろう。

ディズニーはペローの再話をもとにしながらも、シンデレラ像をはるかに単純で受け身的な女の子にしている。ペローのように、舞踏会で見破られまいと確信して義姉たちに近づいて親切に振る舞ったりしないし、義姉が断ることを見越してドレスを貸してほしいとわざと頼んでみることもない。ディズニーでは、不当な扱いに耐えて、命じられるままに食事の支度や裁縫といった家事労働を黙々とこなす哀れな娘として描かれている。ネズミや小鳥と友達であるという設定も、グリムのように呪術的な能力の片鱗としてではなく、むしろ幼児的な印象を強めている。結末での義姉たちに対しても、ペローのように人並みはずれた寛大さを示すこともなく、さりとてグリムのように露骨な報復措置に訴えることもなく（むろん、鳩が罰するのだが、シンデレラは鳩を自在に扱っていたので、間接的なシンデレラの報復と考えられる）、単に無視するだけである。良くも悪くもディズニーのシンデレラは矮小化、単純化されているとすることができる。

また、父親が病死しているという設定も、ディズニーの大きな特徴である。これは、もし父親が生きていれば、シンデレラはこんなひどい目に会わないはず、という前提に立っており、家庭内での父親の権威が大きいことを示している。ペローに登場するような、後妻の尻に敷かれて何も言えない父親像を20世紀のアメリカは許さなかったということであろう。「強い父」の

イメージは、戯画化されて王様にも反映している。早く孫の顔が見たいために王子を結婚させようと画策し、シンデレラが城から姿を消したと聞いて国中を探させ、ようやく探し当てて「これで一安心」と満足そうな王は、他の「シンデレラ」には決して登場しない。支配的な王に比べ、王子の方は一言も発することなく存在感がきわめて希薄である。まるで、王の希望が叶ったことが最高の結末であるかのようにさえ感じられる。

かわいらしく無力なシンデレラは、王子に救ってもらうのを辛抱強く待ち続ける受け身の女性像として定着し、やがて、誰かに依存したいという願望が強く自律的な生き方をしない消極的な女性像として、批判の対象となる。1981年に出版された『シンデレラ・コンプレックス』（コレット・ダウリング著）は、外から自分の人生を変えてくれる何かを待ち続ける女性の心理を分析して、社会現象にまでなった。しかし、これまで見てきたように、本来シンデレラはそのいずれでもなかったのである。

結 語

「赤頭巾」「シンデレラ」という、長い間語り伝えられ、しかも最も浸透しているおとぎ話の中で、女性のイメージがどのように変化してきたかをたどってきた。原話または原話に近いと考えられる再話に登場する女主人公は、洗練されてはいないが、したたかでたくましく、自ら行動することができる。しかし、17世紀末のペローでは、すでに自律性を失い、それに伴って、女性に対する厳しい行動規範（逸脱してはならない、他者には寛容でなければならない、など）が提示され、それに従う女性だけが幸せになれるとされる。また、19世紀のグリムでは、特に母親による教育や保護の重要性が強調され、その教えを正しく学び、実践することが奨励されている。そして、20世紀のディズニーになると、女性は最も無力で受け身的な生き方を強いられている。時代とともに、女性に対する外的圧力が増してきたと考えられる。私たちの多くが読んできた、グリムの「赤頭巾」、ディズニーの「シンデレラ」は、それぞれの再話の中で女主人公が最もかわいらしくて幼く、一方、男性の力（武力、発言力）が最も大きいものである。すなわち、20世紀は男女の格差が著しいおとぎ語を選んできたことになる。現代の女性は19世紀に比べてはるかに自由な生き方をしているように思われるが、実際には、女性をめぐるイデオロギーは19世紀と大差がない、ないしは一層女性を矮小化、無力化してきたと言えるであろう。次世代にどのようなおとぎ

話を伝え、どのような女性像を提示していくべきか、望ましい男/女の姿はどうあるべきか、ひとりひとりが考えるべき時であるに違いない。

注

- (1) cf. アンドレア・ドウォーキン『女性憎悪』（ジャック・ザイプス p 92 に引用）。
- (2) ジャック・ザイプス『赤頭巾ちゃんは森を抜けて—社会文化学からみた再話の変遷』阿吽社(1990) pp.10-12.
- (3) 女の子が「留め針の道」の方を選ぶという類話もあるらしい。cf. ブルーノ・ベッテルハイム『昔話の魔力』評論社(1978) p 242 および、金成陽一『誰が「赤ずきん」を解放したか』大和書房(1989) p.136.
- (4) ジャック・ザイプス 前掲書 pp 111-114.
- (5) ジャック・ザイプス 前掲書 p.87.
- (6) アラン・ダンダス編『「赤ずきん」の秘密—民俗学的アプローチ』紀伊国屋書店(1994) p.98, p.101.
- (7) ジャック・ザイプス 前掲書 pp.157-162. なお、グリムは改訂を続け、初版から第7版までである。
- (8) アラン・ダンダス編 前掲書 p.12.
- (9) cf. ミシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社(1977).
- (10) ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社(1986) p.9.
- (11) アラン・ダンダス編『シンデレラ—9世紀の中国から現代のディズニーまで』紀伊国屋書店(1991)「訳者あとがき」p.385.
- (12) 同上 pp.381-2.
- (13) アラン・ダンダス編『シンデレラ』pp.11-21.
- (14) 同上 pp.31-39.
- (15) 同上 pp 42-51.
- (16) 朝日新聞 1997年11月5日「白雪姫に毒リンゴ、食べさせたのは実母だった!？」
- (17) 国際版ディズニー名作童話14『シンデレラ』講談社(1986).
- (18) アラン・ダンダス編『シンデレラ』p 346.